男の娘な女神様

トマト畑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
男の娘な女神様

【Ｎコード】
Ｎ２５９２Ｗ

【作者名】
トマト畑

【あらすじ】
ノリで倒した相手は女神だった！？
俺が代わりに女神になるのかよー！！
何はともあれ女神様生活スタート。
俺は男だー！！

はいはい、男の娘ですね。

現在第二部スパッツネプテューヌ編をお送りしています。

ではではごゆっくりどうぞ。

人物紹介改（前書き）

９月２４日変更。

人物紹介改

・ユウ

見た目・髪の毛の色は白、長さは腰まで届く位。目の色は青。男の娘である。

・料理や掃除などの家事が得意である。
・戦闘力は女神化する前でも元女神のマジェコンヌを圧倒するほどである。使う武器は双剣。双剣の名前は零刹那と菊壱紋字。

押しに弱く妹達に押され気味である。怒ると恐い。

・シルバーハート

・見た目　変身前から髪の毛は白から銀色に変わる。（髪の色の変化にはなかなか気づいてもらえない。）
目の色は金色に変化している。
身長、体重の変化はない。

戦闘力は変身前より1．8倍上がっている。武器は双剣のままだが菊壱紋字と零刹那は黒から銀色に変化している。
変身後にはいくつかの能力がある。
ひとつは絶対領域。絶対領域の前ではどのようなスキル、能力、奇跡さえも操られてしまう。
二つ目にモードチェンジ。

・怒りの赤
全体的に能力がアップする。接近戦も得意だが主な戦闘距離は中距離～遠距離。戦闘に使用する武器はガンブレード・紅
・優しさの緑
スピードが上がるがその分防御力が下がる。主な戦闘距離は中距離～接近戦。
使う武器は通常形態と同じで零刹那、菊壱紋字。特殊能力として質量を持った分身を任意の数だけ作り出すことができる。そして通常の１０００倍のスピードを出すことができる。（三分間のみ）

性格はネプテューヌの様に変化はない。

史書イストワール

・ユウの頼れるパートナー。ユウに女神としての知識等を教えた人物。

・性格は原作からけっこうずれている。　ユウを溺愛しておりいつもくっついている。

・イストワール単体での戦闘力は０に近い。・本や書物等の物を体内に秘めておりそれを体内から文字通り吐き出す（うおぇぇ～。）

・謎の仮面の幼女

身長はブランより少し高い。顔は仮面を被っているために不明。髪

の毛は腰まで届く位の長さ。色は薄紫色。

何故かユウの事をお兄ちゃんと呼んでいる。軽くヤンデレ持ち。彼女もまた重度のブラコンである。

戦闘力はネプテューヌ達四人を上回る。

仮面の幼女（プロセッサユニット装着時）

プロセッサユニットはユウと同じものだが色は白。

装備は

・ハードバスターライフル一つ

・ビームセイバー二つ

その他不明。

人物紹介改（後書き）

謎の仮面の幼女追加

ＳＳＨのメンバー（前書き）

１０月１０日投稿。

ＳＳＨのメンバー

会員Ｎｏ．１最強の５ｐｂ．

・ＳＳＨ最強の存在その実力はネプテューヌ達四人の女神に匹敵する。

会員Ｎｏ．２　ＬＥＤアイエフ

・シルバーハートに憧れ光り続ける危険な少女。

会員Ｎｏ．３　ダイナマイトな日本一

特撮ものが大好きで身体中にダイナマイトを巻き付けた少女。理由は特撮ものでよくある爆発を実際にする為だそうだ。

会員Ｎｏ．４弟子のガスト

自称シルバーハートの弟子。ユウに怪我をしているところを救われて以来彼を敬愛？している。たまに腹黒い一面も見られる。

会員Ｎｏ．５　布教活動のＲＥＤ

ユウによって復活したロイヤルでエンペラーなドラゴン。ユウを自分の嫁としている。様々な布教活動を行なっていてる。主に動画サイトにユウの動画を投稿したり、シルバーハート様人形を売ったりしている。ちなみに現在の好感度は３００。

会員Ｎｏ．６　デレデレイストワール

いわずと知れたユウの相棒。

会員Ｎｏ．７機械いじりのシアン

ラステイションで小さな食堂を営む少女。ユウの試作型プロセッサユニットを作ったのも彼女で機械関係に関してはまじチート。

会員Ｎｏ．８　まさかのフィナンシェ

ＳＳＨ唯一の？常識人。実は彼女には隠された力があるとかないとか？

会員Ｎｏ．９　お洋服屋さんねぶぁ～

五人で一人の会員という不思議なお洋服屋さん。ＳＳＨの特殊部隊で普段はお洋服屋を経営している。リーダーのナイフ店長カツミ、発火能力を持つレイカ、重火器を使用するケン、くねくねオカマのキョウスイ、マッチョメンのコウゾウの五人がメンバーである。

会員Ｎｏ．１０　謎の天然美少女探偵シャルロック

通称シャル。彼女が行くところいつも事件が巻き起こる。（半分は彼女自身が巻き起こす。）彼女には四つの能力がありひとつは重力制御。二つ目に超怪力。３つ目に機械との意志疎通。四つ目に超頭脳。

SSHのメンバー（後書き）

こうして見ると彼らの力で世界征服とかできそう。（、・ω・、）

女神シルバーハート（前書き）

改訂版

まぁ、駄文です。

女神シルバーハート

俺はなんとなく旅をしている旅人。たまに人を助けたりしながら旅をしている。不思議な力を手に入れたりした。その内なぜかヴァルキュリアとか戦乙女等と言われたりもした。それは女性に付けてあげてほしい。今は四英雄とか言われていた人達と一緒に天界とか言うところに来ているところ。よく分からないが「貴女をお送りします。」と言われて連れて来られてしまった。そう、それが間違いの始まりだった。

俺は天界に取り残された。四英雄の人達は俺を置いて何故か直ぐに帰ってしまった。「女神様ごたっしゃで。」「また会える日まで！！」とかよくわからない事を言っていた。女神様ってだれ？

それから宛もなく天界をさまよった。途方もない年月を。そのせいか謎の変身能力までてにいれてしまった。特撮ものが好きな自分としては凄い嬉しかった。露出が多いのは気になったが。
長い年月を過ごして気づいたが何故か歳をとらない。眠たくならない。お腹もすかない。けどご飯はしょっちゅう食べていた。

とある日いつもの様にモンスターを倒したりして過ごしていると不思議な場所にでた。何やら神秘的な場所に、何故だかそこが自分の為の場所と思っていた。そしてそこの中心には一人の魔女もどきと謎の小人サイズのミニマム少女が本に座って空中に漂っていた。何やら言い争っているようだ。

「マジェコンヌ貴女はいったい何をしようとしているんですか！？

今のままでは下界の住民達が……。」

「決まっているこの世界の全てを手に入れる。そして世界の全てに私が味わった苦しみを味合わせてくれる！！」

「そんな事が出来る訳ありません！！」

「出来るさ。イストワール貴様の力をつかえばな！！」

「貴女まさか！？」

どうやら一触即発の空気というやつらしい。マジェコン……めんどくさいから魔女もどきでいいか、やつの手がミニマム少女に魔の手が伸びようとしていた。

「あのミニマム少女を助けますか。まともに話が聞けそうだしね。あの魔女もどきはさっさと倒すとしますか。」

「さてと行きますか！！」

俺は腰にさしていた双剣零刹那と菊壱紋字を引き抜き魔女もどきとミニマム少女の間に転移する。

「そこまでだ魔女もどき。俺が相手だ。」

彼女達二人からしたら突如として現れた様に見えるのだろう転移非常に便利。

「貴方は？」

唖然としているミニマム少女。

「俺か俺は……。」

ミニマム少女の疑問に答えようとするが魔女もどきが箒らしきものから光弾を放つ。俺は即座に光弾を菊壱紋字の腹で受け止める。

「目障りだ消えろ！！」

「さてどうだろうか？」

続けて放たれる光弾を菊壱紋字と零刹那で切り裂く。

「危険です！！逃げて下さい。」

ミニマム少女たしかイストワールだっけ？

「大丈夫、大丈夫。俺は強いから。まぁ、安心して見ててミニマム少女。」

「み、ミニマム！？む、無理です。彼女は女神です。彼女には誰も勝てません。」

俺はミニマム少女イストワールの頭をひとなでして魔女もどきの前に立つ。

「まあ見てて。変身！！」

その言葉と共に俺の姿が変化する。髪は白から銀色に。瞳は金色に。そして身体に銀色の装甲プロセッサユニットが装着される。

『ｓＥＴｕＰ』

そして降臨する銀色。

「貴様はなんだ！！」

「貴方はいったい？まさかその姿は伝承の……。」

二人の問いに俺は答える。

「シルバーハート。それがこの姿での名前。詳しくは俺も分からない。だがかなり強いよ。」

「見かけ倒しが消え去るがいい！！」

「消え去るのはそっちじゃないか。」

「くっ、なめるなぁー！！」

魔女もどきがまた光弾を放つ。数は先ほどに比べると数が圧倒的に多い。そして光弾が放たれる。

「またたくさんあるなぁ。だけど……。」

光弾が放たれる。そしてそれは俺に向かう。本来なら直撃していっかんのおわりだろう。

「だが甘い！！光波よ敵を穿て。」

俺は両手に持っている黒から銀色に変わった双剣に光を集める。そして向かってくる光弾に向かってそれを放つ。その瞬間全ての音が消えた。

「外したか。」

「な、なんだと！？」

魔女もどきの驚きの声も分かるかな。だって自分の真横の物が消し飛んでいるのだからね。

「これが伝承の女神の力！？」

ミニマム少女が驚きの声をあげる。何やら女神とか言っていたが……。俺の事じゃないよね。まぁ、いいやそろそろ飽きてきた事だしね。

「くっ、なるほど、大した力を持っているようだな。だが私を本気にさせてしまった貴様はこれでおわりだ。」

魔女もどきが先ほどよりも質量の大きい光弾を作り出す。
「さぁ、消え去るが「絶対領域発動。」何？ぐうぉー！！」
魔女もどきが光弾を放つ寸前に俺の能力のひとつ『絶対領域』を発動する。光弾が消えて魔女もどきが地に伏せる。
「ば、馬鹿ないったい何をした！？力が使えないだと！？」
魔女もどきが声をあげる。
「いちいちそんなに驚かなくても良いのにね。」
驚きで顔を（ ゜ ― ゜）なイストワールに話しかけて見る。
「いったい何を！？」
「俺の能力のひとつの絶対領域を発動させたんだよ。絶対領域の前ではどのようなスキル、能力、奇跡さえも操ることができる。」
「す、凄い……。や、やっぱり貴女が私の女神さま……。」
今度は顔が赤くなっている。まるで恋する乙女の様に。
「くっ、ぐぅー！！」
魔女もどきが声をいやうめき声をあげる。『ぐぅー！！』ってこれが噂のぐぅの音か。
「まぁいいや、これでおわりにしよう。」

俺は菊壱紋字と零刹那をひとつに組み合わせる。そして構える。

「こいつの威力はどうかな行くぞインフィニット・ソード。」

目にも止まらない早さで魔女もどきを斬り裂く。

「俺の前に立つのならただ斬り伏せるのみ！！」

オーバーキルもはや魔女もどきはお前はもはや死にすぎている状態である。

「ステキです。うっとり～。（´Д`）」

ミニマム少女はいや、イストワールだっけ？なんだかうっとりしている。

「これでおわり。」

最後の仕上げに一回指を鳴らす。パチン。それと共に魔女もどきが爆発する！！

「ぐ、ぐわあああああああああああああー！！」

「悪・即・爆発ー！！！！」

これは俺のボスキャラ倒した時の決めセリフ。それは言いとして目の前でうっとりしているイストワールに話しかける。

「ちょっといいイストワールさん？」

「はい、何でしょうか女神様？」

「め、女神様？」

何やら嫌な予感……。

「はい今日から貴女は女神様です。」

今日から魔王ならぬ今日から女神様。何かまた面倒事に巻き込まれたのか俺は。

女神シルバーハート（後書き）

あまり変わらないかな？

伝承の女神と勉強（前書き）

改訂版

伝承の女神と勉強

とりあえず俺は今人生の岐路に立たされているのだろう。ノリであんな魔女もどき倒すんじゃなかったよ。

「貴方は今日から女神様です。」

目の前の少女イストワールが恋する乙女の様な顔で話しかけてくる。

「なんで？」

「貴方によって先代の女神マジェコンヌの野望は阻止されそのマジェコンヌ本人も貴方によって倒されましたし。故に貴方が次の女神様です。よくわかりませんが貴方には信仰（シェア）が寄せられてますから問題ありません。それにあの伝承の女神様ともなれば下界の住民達からの信仰もうなぎ登りですよ。」

「信仰ねぇ。けど俺は女神が何をするのか知らないし。」

「大丈夫です。女神の何たるかは私がおしえますから。（＾＿＾）」

いやいやそれ以前に俺は。

「だいたい俺は男だよ。」

固まるイストワール。

「はい？め、女神様いくら何でもそんなことはないでしょう（□－；）！！。」

「いや、本当だから。」

「そこまでして女神になりたくないんですか？だいたい女神様みたいなかわいい娘が男なわけありません。
もし本当だというのなら証拠をみせて下さい。」

「証拠か……。」

「ほらないんじゃないですか。」

「いや、ちょっと待って。どうすれば？」

「じれったいですね。えいっ！？」

突如人のズボンを思いっきりずらすイストワール。

「わぁぁぁ！？」

まじまじととある物を見てくる。

「本当に男、いえ男の娘だったんですね。（＾＿＾）」

「早くズボン返して！？」

「俺が男だってわかっただろう？」

「はい。まがいもない男の娘でした。」

「なら俺は女神にはなれない。わかっただろう？」

「よろしくお願いします女神様。」

「人の話し聞いてた？」

「ではまずは女神のするべきことしなくてはならないことについて話していきましょう。」

「お願いだから人の話しを聞いて。」

少女？説明中。

「わかりましたか（＾―＾）。」

「まぁ、なんとか。」

「今はそれで良いです。今から学んでいけばいいのですから。」

「そんなもんか。」

「そんなもんです。」

「がんばりましょう。（＾・＾）」

「あぁ、がんばってみるか。……いつの間にやら女神する事になっていたよ。」

「しっかり今の言葉録音しましたよ（ノ ゜Ｏ ゜）ノ」
「抜け目ないな。」
「逃がしませんよ（＜＿＞）」
「まあいいか。」
少しは楽しめるかもしれないしな。それに何となくしてみるのもいいのかもしれないと思っている自分もいたからね。
只今イストワールとの勉強中既にかなりの時間がたっている。
「ねぇ、もう九時間は経ったんだけど。いつまで勉強するの？」
「そうですねぇ、後八時間くらいはかかりますよ。」
「はい！？ちょっと、長すぎない。」
「がんばりましょう（＾＿＾）大丈夫ですよ。私の女神様ならこれぐらい楽勝ですよ。何たって伝承の女神様なんですから。」
「わ、私のって俺は君と出会ってまだ浅いとおもうんだけど。」
「そんなことはないですよ。私と貴女は運命の赤い針がねでつながっているんですから。」
「針がねって……。ところで気になってたんだけどその伝承の女神ってなに？」
その質問を待ってましたとばかりにこんな（、Д、）をするイスト

ワール。

「この天界には伝承があるんです。ゲイムギョウ界が暗雲に覆われた時何処からともなく銀色の女神が現れあっと言う間に救ってしまうというものです。」

「なんと言うか随分軽い伝承だね。」

「そんなことはないですよ。今の私は最高の伝承ですから。では長くなりましたが勉強の続きをしましょう私の女神様。」

女神になるの少し後悔してきていたけどこのイストワールの笑顔を見るとなんだかがんばれそうな気がしてきたよ。

「あと7時間かかりますよ。」

「……。」

頑張ろう。

伝承の女神と勉強（後書き）

余り変わってません。

ふらぐ？（前書き）

ちなみにまだネプテューヌ達は生まれてません。

ふらぐ？

とある一日のひとこま。

「おや、何をしようとしているんですか？」

「あぁ、イストワールか。ちょっと暇つぶしに新たにプロセッサユニットを開発しようと思ってね。」

「プロセッサユニットというとあなたが女神化した時に纏っている鎧のことですね。」

「うん。そのとおり。」

「今のままでは駄目なんですか？」

「駄目な事はないけど戦いかたが限られてくるんだよ。」

「そうなんですか。」

「今のプロセッサの絶対領域なら負けはないだろうけど、いざというときはほかの戦いかたもあった方が良いからね。」

「絶対領域？（。―　。）」

「魔女もどきの時のあれ。」

「マジェコンヌの女神の力が使えないようにしたものですか？」

「そうそう。絶対領域。その中ではどのようなスキルも魔法も奇跡も操ることが出来る。」

「やっぱり貴方は異常ですね。」

「はいはい。設計図はこんな感じでっと。」

「私にもみせて下さい。」

「はい、どうぞ。」

「……これは何ですか？」

「それはプロセッサの名前だよ。」

「名前？」

「そう。それぞれネプテューヌ、ノワール、ブラン、ベールって言うんだ。」

後々この四つのプロセッサユニットがあんな事になるとは。

ふらぐ？（後書き）

フラグなのか？

四人の妹さん（前書き）

あの四人登場します。

四人の妹さん

イストワールとの出会いからかなりの年月が経ち今では女神の仕事が少しは板についてきたはず。
なんだかんだで今は休憩中暇つぶしに新しく作ったプロセッサユニットをみながら少しニヤニヤしていたところでもあったりする。

「遂に完成ましたね。全部で四つですか。黒に紫、白、緑。全部貴方の好きな色ですねユウ。」

ちなみにユウと言うの俺の通常時の名前。

「まあね。けどこれで戦闘の幅が更に広がるはずだ。」

「今のままでも充分強いと思います。」

「そうかな？」

「そうですよ。」

暫くたわいもない話しをした。

「ちょっと喉が渇いたかな。イストワールお茶淹れるね。」

「でしたら私はお茶菓子を準備しますね。」

「ありがとう、イストワール。」

「気にしないで下さい。愛しの貴方の為なら構いませんよ。」

そう言ってお茶菓子を取りに行くイストワール。

その姿を見送りつつ今までの事を振り返る。

お腹は空かなくてもご飯は美味しいとか。夜は暗くならないけど眠るようにしていたりもする。きづくとイストワールがベッドに潜り込んで来ているときもあった。お風呂がなかったため自分で作ったりもした。何故かイストワールがニコニコしながら覗いていたりもした。理由を聞くと愛ゆえの行動だとの事だそうだ。そんなことを考えていると四つのプロセッサユニットの様子がおかしいことに気付く。

「発光している？」

プロセッサユニットが光に包まれている。その光は更に輝きを増して行く。

「これはいったい？」

「くっ！？眩しい。」

暫くすると光は止む。すると四つのプロセッサユニットがあったところに四人の少女がいた。

その内の一人の紫色の女の子が近づいてきた。

「お」

「お？」

「お姉様！」

「お姉様！？」

突如として抱きついてくる。そして更には押し倒される。

「あぁ、お姉様！お姉様！」

「ちょっと何処触ってんの！？」

「お姉様良い匂い。ハァハァハァ。」

何やら紫色の少女が危ない行動をしていると……。

茶髪の白い服の少女が何処からともなくハンマーを取り出して紫色の少女ネプテューヌと言うらしい。あれ？その名前は……。

「お姉様から離れろネプテューヌ！！」

「うわぁー！？」

間一髪でネプテューヌがそれを避けると白い服の少女に文句を言う。

「むぅ。いきなり何するのブラン危ないよー！！」
それを無視してブランは俺に上目遣いで心配そうに聞いてくる。
「お姉様大丈夫？ネプテューヌに何か変な事されなかった？」
今度はネプテューヌを睨み付けて。
「お姉様にベタベタしやがって嫌がってるだろうが！！」
何か俺とネプテューヌで態度が違う？
「何言ってんの？どう見たって仲の良い姉妹のスキンシップだったじゃん。」
「どう見てもてめえが無理矢理押し倒してただろが！！」
「あーあー。聞こえなーい。」
「てめえいい加減にしやがれ！！」
ネプテューヌも剣を取り出してブランと戦い始めてしまった。
「お姉様危ないですわ。」
今度は金髪の緑色の服の少女が俺の手を引いてネプテューヌ達から遠ざける。

「お姉様こちらにあの二人は放って置いてお茶でもしませんか。」

「あぁ！？ベールが抜け駆けしようとしてる！！。」

それをネプテューヌが見つける。

「あら、抜け駆けなんて失礼ですわ。私はただお姉様とお茶しようとしていただけですわ。」

「そういうのを抜け駆けって言うんだよ！！」

「文句があるならかかって来なさい！」

ベールまでもが槍を構えて戦闘に参加していった。みんな好戦的だなあ。

くいくいっと俺の服の袖をを引っ張ってくる黒い服装の少女。あの三人の名前がそれぞれネプテューヌ、ベール、ブランということは彼女の名前は……。

「ノワール？」

「はい。どうかしたお姉様？」

「君はいや君達はもしかして……。」

「待ってお姉様、言いたいことも分かるけど今はお茶を飲まない？せっかくの淹れたてが冷めてしまうわ。」

俺が淹れていたお茶を指さしノワールが言う。

「そうだな。お茶は淹れたてが一番だしね。」

俺は今出来る最大の笑顔をノワールにむける。

「っ！？／／／／」

赤くなるノワール。

「三人も一緒にお茶飲まない？」

一応争っていた三人にも聞いてみる。

「「「喜んで！！」」」

よほど喉が渇いていたのだろうか？

現在五人でお茶を飲んでいる。

俺の右隣にはベールが左隣にはネプテューヌがブランは俺の膝の上に座っている。そして向かい側の席にはノワールが座っている。

「率直に聞くけど君達はやはり俺が作ったプロセッサユニットなのか？」

俺の問いにノワールがこたえる。

「そのとおりよ。私たちはお姉様が作り出したプロセッサユニットが基になって擬人化したものなの。」

「基？」

更にブラン付け足す。

「……そうあくまでもプロセッサユニットは基。……それにお姉様の優しさ、思いが。そして願いが私たちを生み出した。」

「俺の……。」

「難しい事はわかりませんがお姉様は自分の力を過小評価し過ぎですわ。今のお姉様はそれこそ願えば何でも叶う位の力はあるのですよ。」

「過小評価ねぇ。」

ベールの言葉通りだろうか？

「あーもう！！そんな難しい事どうでもいいの、私はお姉様とイチャイチャできれば」

飛び付いてくるネプテューヌ。

「あらあらネプテューヌだけずるいですわ。」

更に反対側から抱きついてくるベール。

「～♪」

すでに膝に座っていたブランは真正面からそのまま抱きついてくる。

「べ、別にイチャイチャなんてしたくないんだからね！」

そっぽを向くノワール。

「……うぅ。やっぱり私もイチャイチャする～。」

ノワール陥落。後ろから抱きついてくる。

四人にもみくちゃにされる俺そんな時。

ドサッ。

紙袋が落ちたような音がした。その方向を見るとイストワールがいた。

ただしこんな顔で。

（。—。）

無表情でじっとこっちを見ている。その無言の威圧に抱きついていた四人も固まる。

「飽きたんですか？」

「えっ……。」

「私にはもう飽きたんですか？私はもう過去の女なんですね！！」

「いやいやちょっとまてイストワール。」

「若い女の子が良いんですね。私はもうパートナーじゃないんですね。ぐすっ、ううっ。信じてたのに～。うわぁーん！！（ＴｏＴ）」

泣き出したイストワール。この誤解を解くのにかなりの時間が必要だったのは言うまでもないだろう。

四人の妹さん（後書き）

主人公女の子と勘違いされたまま終わってしまった。

驚愕の事実（前書き）

ユウがやっと自分の性別を話して酷い目に会います。

※ひとつ主人公の性別は男でも男の子でもなく男の娘です。

※二つキャラ崩壊いえ決壊は当たり前。

※三つ駄文です。

驚愕の事実

「しかしながら擬人化とは我ながら驚きだ。」

あの後イストワールになんとか事情を説明して事なきを得た。まぁ、そんなとこ。

「アナタならもう何をしても私は驚きませんよ。（^＿^）」

何気に酷いぞイストワール。

今はイストワールを合わせた六人でお茶をしていた。

お茶菓子はイストワールが持って来たシュークリーム。それはいい。シュークリームは大好きだしだが……

「何この俺のシュークリームはペタンコ！」

そう俺のシュークリームだけペタンコ。イストワールが紙袋を落とした時に潰れた物みたいだ。

「自業自得です。（。＿。）」

頬をハムスターの様に膨らませプイッとそっぽを向くイストワール。

可愛いじゃない。
ちなみにイストワールは俺の服の中に入って襟元から（。—。）を出している。

「お姉様これ美味しいね。」

「ネプテューヌ美味しいのは良いがクリームが付いてるぞ。」

頬に付いていたクリームを指ですくいとるとすぐに口に運ぶ。

「うん、甘い。」

何故かその瞬間みんなの動きが止まった。そして口にクリームをつけ出した。

（。—。）×四

何この期待した様な視線。

まぁ、そんなことよりも……。

「俺の願いが叶うと言うならばこのシュークリームを本来の姿に、できればもう少し大きくなれ。クリームたっぷりで！」

シュークリーム変化なし。

「何も起きないだと！？」

何かむなしいな。

「可愛らしいですわお姉様。よろしければ私のを半分どうぞ。」

「……私のもあげる。」

「ありがとうブラン、ベール。」

二人からシュークリームを受けるとそれを食べる。

「もきゅもきゅ。ごっくん。」

何故か全員が微笑ましい物を見る様な目で見てくる。

「美味しかった〜。……やっぱりこの潰れたのも食べようかな。」

「お姉様私のも食べてもいいわよ。」

ノワールが顔を赤くしてそっぽを向きながらシュークリームを乗せて皿を出してくる。

可愛いじゃない。

思わず抱き締めてしまった俺は悪くないはずだ。

「お姉様だ、駄目よ。いくら女どうしだからって、私の理性が決壊するわ。っていうか決壊しても良いかも。むしろＯＫ？」

顔がトマトよノワールさん。後目が恐いぞ。

「……！」

「あらあら。」

「私も抱き付くー！！」

再び全員が抱き合う形となる。何か良いねこういうの。
だがイストワールが……。

「む、むぎゅー！？（＜ε＞）」

「イストワールが俺のシュークリームの様にぺたんこ！？みんな離れて離れてー！！更にはイストワールが食べていたシュークリームが潰れて服の中がベタベタにー！！」

「私は貴方の胸の中で死ねるなら私はほんもうでした。（・｜・）」

漫画の様にぺたんこになっていたイストワールを引っ張り出して丸めたり引き延ばしたりしてなんとかしました。

「恐い事言わないでよ。それにしても中がベタベタだよ。」

服のボタンを外し胸をはだける。

「「「「「ぐわあ！？」」」」」

四人が意味不明な声をあげる。だが今はこのクリームをどうにかしないと。

「舐めちゃえ、ぺろっ。甘い。」

指で少しすくって舐めてみる。

「「「「「ぷぎゃー！！」」」」」

こいつらは人が困っている時になんなんだ。

「これは誘っているのかしら。」

鼻を押さえて上を向いているノワール。

「……落ち着け私、私はクールで無口系美少女ロリキャラ。ここで感情的になれば絶対後悔する。」

テーブルに顔を伏せて何やらブツブツ言い出したブラン。

「お姉様の白い肌に付いた白いクリームを私は舌で舐めとる。最初嫌がるお姉様、だけど段々とその快楽に耐えきれなくなりそして最後には私に全てを委ねてしまう。」

何やら危ない事を言い始めたベール。自分で言って自分で興奮しないでくださいねー。

「お姉様わたしが舐めてあげようか？」

お前がある意味一番純粋だなネプテューヌ。

「いけませんよユウ。年ごろの男の娘が胸を露出したら。してもいいのは私と二人きりの時だけですよ。」

「あぁ、ごめん。。年ごろの女の子の前でこれははしたなかったね。一応俺も男だしね。……あれ何で皆固まっているの？」

「あ、あのお姉様私の聞き間違いかもしれませんがいまのお二人のお話しを聞く限りお姉様は男性なのですか？」

ベールがおそるおそる聞いてくる。

「うん。だからね最初からそう言ってたでしょう？」

「いえいえ聞いていませんわ。」

「あれ、そうだっけ？」

「「「「うんうん。」」」」

全員が一斉に頷く。そういえばお姉様を訂正するのを忘れていた。

「まぁ、言ってなかったのは悪かったけどこれからはお姉様ではなくお兄様でよろしくお願いします。」

「あ、ありえないわ！！こんなに可愛い娘が女の子じゃないなんて。証拠は証拠！！」

「イヤイヤ、どうみても男だろうノワール。胸もないし。」

更に服をはだけさせ胸をみせる。

「ぐふぉ！わ、わからないわ、もしかしたら胸がぺたんこなだけかもしれないし。」

「え～。ブランはどう？」

「私はどっちでもいい。お姉様はお姉様だから。」

「ネプテューヌは？」

「私はちょっと驚いたけどありだと思う。いやむしろＯＫ！」

「ベールは？」

「絵的にはありですわね。」

絵的？

「なら証拠を見せれば良いじゃないですか。えい、えいっ！！」

「なっ、イストワールやめろまた脱がせるきかやーめーろー！！」

イストワールのズボンずらしから逃げる俺。

「良いじゃないですか。へる物ではないですし。」

「いろいろ減るんだよ。」

そんな感じを繰り返してはや三十分。

「あーもーじれったい！！」

ノワールが待ちくたびれたのかいきなり立ち上がる。

「おりゃ！！（ノ＜д＞）ノ」

ズボンを引きちぎった。無論どうなるかは言うまでもないだろう？

「ま、まさかほんとにお姉様はお兄様！？」

ノワール自分でやっといて何を言う。

「……よし。」

「ブラン、なにがよしなんだ？何でガッツポーズ？」

「リアル男の娘。実在したなんて！？」

「違うぞベール。俺は男の子！！」

「我がよの春がきたー！！」

「ター〇Xだと！？ネプテューヌなぜそれを知っている。もういいからズボン返して！？」

「はい。」

ノワールが引きちぎったせいでズボンが

「ボドボドダー！」

「仕方ない。プロセッサユニット装着。プロセッサユニット装着完了。女神シルバーハート降臨！どうだこれなら服が破けても問題ないだろ。」

四人ともまたもや無反応。イストワールは変身と同時に機能一時停止させた。本の状態になって隅にでも転がっているだろう。少しは反省して下さい。

「「「「ふつくしい。」」」」

「社長！？」

「でも私たちもできるよ変身。」

胸をはるネプテューヌ。

「やっぱり出来るんだ。みせてみせて。」

「……残念だけど私達の変身は好感度を一定の値まで上げないと見れない。でも私のは振り切れてるからいつでもみせてあげる。」

「ブラン、それ結局どっち？」

「さあ？」

知らないようだ。

「まぁ、いいや。みんなこれからよろしくね。」

「無理矢理まとめたわね。」

「だって疲れたんだもん。」

「お兄様これからよろしくね。」

「……よろしく。」

「お兄様いろいろご迷惑お掛けしますがよろしくお願いしますわ。」

「よろしく～！！」

これから忙しく、いや一応楽しくかな、そう楽しくなっていきそうだな。でも嬉しいかなだって『家族が欲しい』という願いが叶うのだから。

「私は放置ですか。（ＴｏＴ）」

あ、忘れてた。

驚愕の事実（後書き）

ここのイストワールはもう取り返しがつかない。

ネプテューヌは欲望に純粋。

ノワールはツッコミツンデレ。

ブランは自称無口系クールロリ美少女。

ベールは妄想癖の廃人。

主人公は男の娘。

まぁ、暖かく見守って下さい。

ブランとの一日（前書き）

まぁ、題名通りです？

ブランとの一日

今日はブランと一緒に天界の図書館で読書中である。この図書館は俺が女神となった後に立てられた物である。かといって俺がこつこつと作ったわけではなく、ただ単に『あったらいいなー』と思っていたらいつの間にやら出来ていた。いやほんとに。ご都合主義？何それ美味しいの。イストワールは『私がいるから良いじゃないですか。』と言い図書館を度々消し去ろうとする。　まぁ、そんなことは忘れてしまおう。

「お兄様続き早く読んで。」

「あぁ、ごめん。」

今はブランに膝枕をして本を読み聞かせている。

「白貫姫はふがいない王子様の代わりに魔女をしばいてしまいました。そして王子様をお尻に敷いて幸せに暮らしましたとさおしまい、おしまい。」

「いつの世も女性は強いね。」

「白貫姫はきっと拳法かなにかを習っていたんだよ。」

そう思わないとやってられない。

「次はこれ。」

ブランに新たに本を渡される。題名は……。

「ピーチボーイ・裏切りの始まり。欲望とメダル。」

ツッコミどころが多すぎる。

「まぁ、良い読むよ。」

「うん♪」

足をバタバタさせるブラン。

「こらはしたないからやめなさい。パンツ見えるよ。」

「みせてるの。ちらっ。」

「……皆さんが知っているピーチボーイ。それは桃から産まれたボーイがお祖父さんと死闘を繰り広げキング〇ブハ〇トの称号を得てお供のフェニックス、ワーウルフ、ラオシ〇ンロンの三匹と共にメダルの怪人グリードとグリードが人の欲望を基に生み出したヤミーと闘うハートフルラブコメディーであろう。」

「そうなの？後パンツ見えた？」

「いや、たぶん違うと思う。後白いパンツなんて見てないから。」

「そうなの？ニヤニヤ。」

「無表情でニヤニヤとか言わないで。後ごめん見ました。」

「興奮した？」

「べ、別に～。」

「確かめてみよ。くる。」

身体の向きを変えて膝枕に顔を埋めるブラン。

「こ、こら何処触ってるの！？」

力づくで離そうとする。だが変身されてしまう。純粋な力では俺はブランには負けてしまう。さすがに絶対領域でも腕力はどうしようもない。

「止めないともう本は読まないよ。」

「それは嫌。」

くるっと向きを戻すブラン。

「変身は止めないの？」

「うん。生足で好感度をあげるの。」

俺は生足見せれば好感度があがるのか。

「とりあえずこの本は読まないでおこうか。この本一冊でまた別の物語が始まる予感がする。」

「否定できない。今日はもう本は良い。眠たくなってきた。」

まぶたを擦るブラン。

「ならお部屋行こうか？」

「うん。お姫様抱っこでお願い。」

「はいはいお姫様。」

ブラン&ユウ移動中。

ブランの部屋に行く途中イストワールを見たようなきがしたがまあ気のせいだろう。

部屋に到着。

「ブラン着いたよ。」

そう言ってブランをベッドに横にする。そのまま立ち去ろうとするがブラン引っ張られベッドに引きづり込まれる。

「一緒に寝て。」

「はいはい。ブランは甘えん坊だなぁ。」

「すぅー。」

「寝るの早っ！？まぁ、いいや。お休み、ブラン。んっ。」

ブランのおでこにキスすると俺もそのまま眠りにつくため目を閉じる。

「んっ、ちゅ。」

唇に柔らかく微かに湿っぽい感触がしたが気にせずそのままブランを抱き締め眠りにつく。

「おでこじゃ物足りないから。お休みお兄様。」

そしてブランとの一日が終わる。

ブランとの一日（後書き）

天界の図書館はカオスのように見えるがちゃんとした本もあります。

大陸管理（前書き）

展開早いです！！
駄文です。

大陸管理

今はご都合主義もとい俺の純粋な願いによって作られた会議室にて全員を集めて話し合いをしている。ちなみに全員女神化している。

「これより、綺羅星じゅ、じゃなくて女神総会を始める。今日の議題は今俺が管理している四つの大陸についてだ。」

「はい、先生。」

質問及び意見する時は挙手をする事となっている。

「はい、ネプテューヌ君。」

「今日の下着の色は何ですか？」

「女神化している時はプロセッサユニットを直接着ているため下着は付けていません。」

俺の女神化した姿はほかの四人の様にレオタードではなくスパッツである。

「そうなんですか？私興奮してきました。お花摘みに行ってきてもよろしいでしょうか？」

「駄目です。お前は女神化して性格は変わっても欲望には忠実だね。」

「ありがとうございます。」

「ほめてません。」

「ユウ話がそれてますよ（＜ε＞）」

イストワールがいましめてくれる。だがその顔をはなに？

「では改めて、俺が管理している四つの大陸。プラネテューヌ、ラスティション、ルウィー、リーンボックスは知っていますね。簡単に言えば女神候補生である貴女達四人にその大陸を一人ひとつずつ管理してもらいます。」

「「「「「えぇ～。」」」」」

ある意味予想通り。

「反論はゆるしません。お前ら毎日ただ遊んでいるだけだろう。ニート街道一直線だぞ。」

「今はコミケに向けての衣装作りで大変なのよね。あ、安心してお兄様の衣装もちゃんと作ってるから。」

「それでも私は働きたくないですわ。」

「働いてもいいけど抱いて下さいお兄様。」

「……小説の執筆が忙しい。」

「ニートな妹達とは口を聞かない。」

ぷいっとそっぽを向く。

「「「「喜んで大陸管理をさせてもらいます。」」」」

ニヤッ、計画通り。

「しきり直してと。イストワール四大陸の地図だして。」

俺はイストワールに指示をだしてウインクをする。するとイストワールもウインクを返す。そして自らの口の中に手を突っ込む。

「うおぇぇぇー。」

「「「「吐いた！？」」」」

「いや、違う。イストワールは自らの体内にある書物を取り出しているだけであって嘔吐しているわけではない。」

俺も初めて見た時は引いた。

「はい、終了しました。どうぞユウ。」

「あ、ありがとう。うわっ、何かベタベタした液体が。」

俺は地図を受けとり開くなんかあちこちべたついてる。

「まあいい、これが四大陸だ。お前達にはこの大陸をひとつずつ管理してもらう。誰がどの大陸を管理するかはすでにアミダで決めました。」

「そんなに簡単に決めていいものなの？」

ノワールが頬杖をついて呆れた様に言う。

「ノワールこれ作るのに三時間もかかったんだよ。」

「お兄様も大概暇そうよね。」

全員が同様に呆れた顔をして俺を見る。ヤバイヤバイ兄としての威厳が……。

「ま、まあアミダはおいといて誰がどの大陸を管理するかを発表します。」

「「「「逃げた。」」」」

「まずはネプテューヌにはプラネテューヌを管理してもらいます。」

「任せてお兄様！あと結婚して下さい。」

「次はノワール。」

「スルー！？スルーなのね、興奮してきたー！！」

いちいち叫ばないでほしい。今ちょっとびっくりした。

「ノワールにはラスティションを管理してもらいます。」

「全力を尽くすわ。それでお兄様新しい衣装採寸したいから後で来てもらっていいかしら？」

「いいけど変なの着せないでよ。ミニスカート履いて下界のみんなに見られたのはかなり恥ずかしかったよ。次はベール。ベールにはリーンボックスを管理してもらいます。」

「がんばりますわ。ところでお兄様私ほしいゲームがあるのですけれど。」

「3日前に買ってあげたばかりだろう。お前はニートを通り越して廃人街道一直線だな。」

「まぁ、ありがとうございますお兄様。後3日前に買ったゲームはもうクリアしましたわ。」

「ほめてないから。次はブラン。ブランにはルウィーを管理してもらいます。」

「……わかった。後お兄様また小説書いたから読んで見て。」

「わ、わかった。暇があったら読んでおくよ。イストワール保管しておいて。」

俺はブランから渡された本をイストワールの口に突っ込む。あの小説はある意味トラウマものである。簡単に言えばブランの小説は酷い！！我が妹ながらこの酷さはやばい例えるならばエスカルゴをレストランで注文したら生きたかたつむりが出されるくらいに。

「やめてください。こんなに大きい物入りません！こんなのいれられたらわたしこわれちゃいまげぼらああ！？」

「お兄様イストワールが白目むいてるけど。」

「ノワール、こいつはこんな事じゃ壊れない。何故なら俺のパートナーなんだから。」

「えぇ、私はこんなの慣れっこですよ。」

俺の言葉が聞こえたのかイストワールがブランの小説を飲み込んで生き返る。

「貴方達やっぱり異常です。」

「ごもっともだけどお前はその異常の妹だからねノワール。」

「あぁ、そうだった。なら私も異常なのかしら。」

頭をかかえ本気で悩み始めたノワール。だが俺はそんなことを気にせず話しを締めくくる。

「これにて女神総会を終了します。まぁ、大陸管理については俺がサポートするから安心してあと何か聞きたいことがあったら聞きに来て。じゃぁ、みんながんばって。」

「失礼しますね。」

俺とイストワールは女神総会が終わると別の部屋に転移する。

「「「「消えた!?」」」」

四人はそれを見てたいそう驚いたそうな。

場所は変わってイストワールとユウが転移してきた部屋。そこは全体的に白で統一された色の部屋であった。

「よかったんですか？」

イストワールいつになく真剣な表情でユウに聞く。

「ん、何の事？」

「とぼけないで下さい。大陸管理をあの娘達四人にさせる事です！！」

ユウのとぼけた態度にイストワールが怒りを隠さずに言葉を紡ぐ。

「今はただでさえ大変な時期なのにさらに厄介事を増やさなくてもいいではないですか！！このままでは貴方の身体に負担がかかりすぎます！！」

「そこまで負担がかからないとは思うんだが。」

それを聞いてイストワールはさらに語気を強める。

「私が知らないとでも思っているんですか？最近のモンスターの大量発生、異常気象、シェアの低下を防ぐため貴方が休む間もなく動いていることを！！」

「やっぱりばれていたか。」

「当たり前です！！私はこの世界その物なのですから。」

「なら分かるだろ。頭の良いお前ならあの四人に大陸管理を任せた理由を。」

その言葉にイストワール唇を噛みしめうつむく。

「シェアの分割。貴方へ向けられているシェアをあの娘達四人に……。」

「そうあの娘達に向けてあの四人に新たな女神となってもらう。あの娘達も素質は充分あるんだから大丈夫だよ。」

「それでいいんですか？貴方が今まで集めてきた信仰を全てをあの娘達に渡してしまっても。」

「別に構わないよ、それに大陸管理は大変な事ばかりだしね。あの娘達にも大陸管理が大変だという事を分かってほしいからね。大陸を一人ひとつだから大丈夫だよ。」

「わかりました。私はもう何も言いません。ですが……。」

イストワールがうつむく。

「ですが私の前からいなくならないでください。傷つかないでください。貴方がいなくなるのは傷つくのは見たくない。」

「イストワール……。当たり前だろう。お前は俺のパートナーじゃないか。」

イストワールの頭を撫でつつ微笑む。

「そう言われるともう何も言えないんですよね。私も甘いです。でしたら今日は一緒に寝ても良いですよね。パートナーなんですから。」

「調子に乗るなと言いたいところだけどまぁ、今日だけだからね、変な事するなよ。別に嬉しくなんかないんだからね。」

何故かそっぽを向いて言う。

「では、変身♪」

「えっ！？」

イストワールの掛け声と共にその身体が光に包まれる。

「眩しい！？」

イストワールを包んでいた光が消える。

「どうですか？」

イヤイヤ何それ！？

「俺聞いてない！？なんでおっきくなっているー！！」

そうイストワールが大きくなっていた。ブランより少し小さいぐらい。

「あの娘達には負けられませんから。これじゃあおきに召しませんか？」

「いや、そんなことはないんだけどまぁ、気にするだけ無駄か。寝ちゃお。」

気にせず部屋の備え付けのベッドに入る

「えへへ（o＜v＜o）」

イストワールが隣に入って来る。そして腕に抱きついてくる。

なんだか良い夢が見れそうな気がした。

「「お休み。」」

そして二人は眠りについた。

大陸管理（後書き）

まぁ、こんな感じです。感想待っています。

ノワールとの一日（前書き）

どうしよう一話一話がかなりの短さ。

ノワールとの一日

今俺はノワールの部屋に訪れている。今では来たことに少し後悔している。

「さぁ、お兄様これを着てみて下さい。」

メイド服らしき物を手渡される。

「ちょっと、ノワールこのメイド服スカート短すぎだろ。」

「ちがうわ！それはメイド服ではなくて今大人気アニメ『マジカル★ニャンコちゃん』のコスチュームよ！！」

凄い気迫だな、一瞬ひるんだぞ。

「さぁ、お着替えしましょうお兄様♪。」

「ま、まて着替えぐらいは自分でできるから。」

「これを着るの大変なのよ、だから手伝ってあげる。さぁ、さぁ！！」

何かまずいと直感が訴えてくる。ノワールの手が肩にかかる。

「わかった、わかったから。」

凄い良い笑顔である。

「ううっ。」

ただいまノワールにより着替えさせられ中。

「ここはこう付けてと、それにしてもお兄様の肌って白くてすべすべして羨ましいわ。」

指で背中を撫でられる。

「ひゃう!?」

思わず声をあげてしまう。

「あらごめんなさい、感度も良いのね。ほんとに男にしておくのは

勿体ないわね。」

今は何を言われようとも我慢しなくては。下手に何かすると後が恐い。

「はい、ネコミミ付けて出来上がり♪さすが私良い仕事してるわねー。」

「ううっ、恥ずかしすぎるー！！」

考えてほしい年ごろの男がこの恰好だぞ。かなり精神的にきついから。

対象的にノワールはニコニコしている、カメラを構えながら。ん？

「カメラ！？」

「次は撮影会ね。その顔いただき。」

パシャッという音と共に撮られる。

「ちょっと待ていくら何でも撮影は止めて。」

「大丈夫よ。誰にも見せないから。それとも今までの写真下界にばら蒔いてもいいの？」

「わ、わかった。だからそれだけは止めてくれ。」

想像しただけで恐ろしい。

「じゃぁ、まずは女神化してちょうだい。勿論服はそのままよ。」

「わ、わかった。変身。」

俺はシルバーハートへと姿を変える。

ノワールはシルバーハートになった俺の姿を見て二、三回頷く。

「やっぱりこっちの方がしっくりくるわね。じゃぁ今から私のいった通りのポーズをとってくれるかしら？」

拒否権はないんだろうどうせ。

「もう開き直ったぞ、よしどんとこい！！」

心の準備はＯＫだー！！

「まずはそのミニスカートをたくしあげてみて。」

「いきなり予想を遥かに越えたー！！」

イヤイヤこの短いスカートをまくるとかもう下着が見えるだろうが。

「スパッツだから問題ないでしょう？それに主人公のニャンコちゃんのモットーはスパッツは見せないと恥ずかしいもん。」

え、何そのストライクなうっちーず的な考え方は。

「さぁ、早くしてくれるかしらお兄様。時間は有限なのよ。」

「はいはい。」

仕方く俺はスカートをまくり上げる。

「素晴らしいわその恥ずかしそうな表情もいただきね。ナイススパッツ！！」

何度もカメラのフラッシュがたかれる。

「ねぇ、ノワール。」

俺は前から思っていた疑問をノワールにぶつける。

「何？あぁ、次は四つん這いになって。」

「よ、四つん這いね。自分ではコスプレしないのか？」

「するわよ。」

「その割にはあんまりそんな姿を見かけないけど。」

「みせてないから当たり前。もしかして見たいの？」

「ちょっと興味があるかな？」

カメラをいったんしまうとノワールは俺の四つん這いに合わせて座っていた椅子から立ち上がる。。

「じゃぁ、着替えるから待ってくれるかしら。」

「わ、わかった。」

俺はそう言うとノワールのコスプレした姿を想像する。コスプレするのは構わないんだけどこの服見たいに露出が多いのは何か嫌だな。理由はよく分からないんだけど。

「終わったわよ。」

早!?

コスプレしたノワールは何故か女神化した状態にフリルがふんだんにあしらわれたピンク色のゴスロリとか言う恰好だった。

「おおー。」

「何?やっぱり変かしら。だからいやだったのよね。」

何故か落ち込むノワール。

「そんなことないよ。凄く可愛いよ！」

その俺の言葉に何故か驚くノワール。

「か、可愛いってなんでそんなことをどうして簡単に言えるのかしら。その姿で言っても嫌味にしか聞こえないし。」

何やら言ったようだが小さくてよく聞こえなかった。

「ん？ごめんノワールよく聞こえなかった。もう一回聞いていい？」

今度は何故か怒っている。喜怒哀楽がゆたかな娘である。

「なんでもない。今日の撮影会はこれでおわり。」

おおー。何か知らないが終わったよ。そんなことを考えているとノワールに押し倒される。

「ノ、ノワール急にどうしたの！？」

「馬鹿お兄様。今日は二人きりなんだから少しは気をきかせてよ。」

顔を赤くしてそっぽを向くノワール。

あぁ、ようわあまえたいのか。

「今日は気をきかせて二人で遊ぶか？」

一瞬ノワールは笑顔になるがすぐに顔を引き締める。

「しょうがないからいっしょに遊んであげるわ。まったく寂しがりやのお兄様にも困ったものだわ。」

「はいはい。」

その日一日はノワールといろんな事をしてあそびました。

終わりだー！！

ノワールの部屋から出るときどこかで見かけた本が凄い勢いで浮遊し移動していた。

ノワールとの一日（後書き）

なかなか話が進まないー！！

怒りの赤、奪われたスパッツ！！（前書き）

感想が欲しいー！！　できればほめてくれれば作者はやる気を出します。

怒りの赤、奪われたスパッツ！！

四人に大陸管理を任せてかなりの年月がたった。今では俺が教える事もなく全員がその大陸の女神として信仰されている。そして俺の出番もなくなり女神の力もなくなると思っていた。だが俺の女神の力は失われなかった。以前として女神化も可能であり力は持続していた。イストワールでさえもその理由を解明することは出来なかった。ただまだどこかで俺の事を信仰してくれているのかもしれない。だがそれはあり得ないと俺は思っている。今では俺は下界の事には干渉はほとんどせずに過ごしている。時折妹達が手におえなくなった際にこっそり手助けしていただけである。そんなことを考えているとイストワールより驚きの報告を受ける。

「ネプテューヌ達が戦闘を？」

「はい。何やら女神化して本気で争っているようで。」

確かにここ最近あの娘達がギクシャクしたり互いの大陸の管理について争っているようなことはあったが女神化して戦闘を行うのは危険すぎる。怪我どころでは済まないかもしれない。仕方ない、様子を見て場合によってはお仕置きしないといけないか。

「イストワール場所は？」

「ここから少し離れたモンスターも現れないはずれの場所になります。」

「あぁ、あそこね。わかった、転移で直ぐに向かうぞ」

「了解しました。」
俺とイストワールは四人がいる場所に転移する。

「到着っと。さてあいつらは、いたいた。」
到着して四人を探すと以外と直ぐに見つける事ができた。

「やはり何かあるようですね。全員殺気だってますよ。」
イストワールの言葉通り四人の表情には相手を本気で叩き潰すという意思が明確に読み取れる。

「しばらく様子を見てみようか。」

「その方が賢明でしょうね。今出て行っても状況を悪化させるだけですしね。」

四女神ｓｉｄｅ

四人の女神達は斬り合いを続ける。四人の力は拮抗して決着が付かない現状である。

「埒が空かないわね。」

ノワールが忌々しげに他の女神を睨み付ける。

「確かにそうですわね。」

ノワールの言葉に同意しつつも槍を構えるベール。
「……なら誰か一人を先に消す。」
自らの身体の大きさに合わない戦斧を構えて静かに発言するブラン。
「それも良いわね、一番邪魔な奴を消すと言う事で良いかしら？」
「構いませんわ。」
「……別に構わない。」
ノワールの言葉に賛成するブランとベール。
「誰を倒すかだけど……。」
その言葉と共に今まで語りあっていた三人の視線が一人に集まる。
「……ふふふっ。ん？何かしら三人ともそんなにわたしを見つめて。」
今までひとつの発言もせずに何故かニヤニヤしていたネプテューヌへと。
「貴女ね。」
「てめえだな。」
「貴女ですわね。」
「……？何がかしら。」

三人の発言の意味がまったく分かっていないのか首を傾けるネプテューヌ。

「貴女人の話しを聞いてなかったの？っていうかさっきから何ニヤニヤしてるのよ気持ち悪いのよ！」

ノワールの言葉に納得がいったのかうんうんと頷くネプテューヌ。

「ふふっ、驚かないでちょうだいね。これを見なさい。」

ネプテューヌが何処からともなくスパッツを取り出し上空に掲げる。

「……スパッツ？」

今度はブランが首を傾ける。

「そうスパッツよ。言っておくけど私のではないわよ。」

黒いスパッツ。取り出したネプテューヌ本人の物ではないとするならと三人は互いを伺う。ふと三人の考えが一致する。

「「「まさかお兄様の！？」」」

「そのまさかよ。やっとの思いで手にいれたのよ。あぁ、早く戦いを終わらせてくんかくんかしなくては。」

恍惚の表情でスパッツを懐にしまう。

「「「……。」」」

静かにそれぞれの武器を構える三人。

「あ、あら恐い顔をしてどうかしたのかしら三人とも。まぁいいわめんどくさいからまとめてかかって来なさい。」

三対一戦いをすればどちらが勝かは一目瞭然。だが今は分からない何故ならば

「「「「スパッツー！！」」」」

スパッツが出てきたのだから。

ユウｓｉｄｅ

「「「「スパッツー！！」」」」

俺は今頭を抱えて妹達の戦いを見ていた。

「スパッツの力は凄いですね。」

イストワールが何かを言っているようだがまったくもって頭に入って来ない。

「あいつらの育て方いったいどこで間違えてしまったのだろうか？」

「生まれた時からではないでしょうか？」

俺はあいつら四人が生まれた時から今までのことを思いかえす。正直甘えさせすぎたかな。調子に乗っている部分もあるのではないかとさえ思えてくる。そして俺が受けてきた理不尽な扱いを思い出す。すると驚くほど頭がすっきりしてプッツンと何かが俺の中で切れる。

「そうだあいつらには少し反省してもらわねば、変身。」

俺の姿がシルバーハートへと変わる。だがひとつおかしいことがある。

「赤色？」

今イストワールが呟いた通りいつものシルバーハートのプロセッサと色が違い何故か赤かった。

「簡単に言えば俺のプロセッサユニットは感情に反応するんだ。今は怒りの感情ね。」

「なるほど……。それであの娘達をどうするんですか？」

「お仕置きそれと少し早いけど例の計画を実行する。」

そして俺は妹達に向かってゆっくりと歩き出す。

「あの娘達のご冥福を祈ります。」

イストワールはこっそり十字を切っていた。

四女神ｓｉｄｅ

四人は四人共にボロボロであった、スパッツのせいで。

「ネプテューヌいい加減にスパッツを渡しなさい。」

荒い息を整えながらノワールがネプテューヌに言う。

「お兄様の神聖なスパッツは私のもんだ！！」

普段兄の前では考えられないような発言をするブラン。

「ふふっ。お兄様のスパッツ、私はそれを隠しもっているのがお兄様にばれてしまう。そしてお兄様は私を無理矢理押し倒されてしまう。そしてそのまま……。」

最早取り返しが付かないベール。

全員が武器を構え直す。そして

「「「「決着をつけ……！？」」」」

ようとしたその瞬間女神四人に向かって圧倒的な闘気と怒気がぶつけられる。

四人がその方向を向くと自分達の愛する兄がいた。普段なら直ぐにでも飛びついて行くのだが今の兄には誰も近づけないでいる。兄は

とても良い笑顔なのだが今の兄は目が笑っていなかった。
「みんな♪こんなところでのうのうとひとのスパッツを巡って何をしているの？」
「えっ、いや、あの。」
兄の言葉に反応しようとするが上手く反応出来ないノワール。
「「……。」」
まともに兄の顔すら見れないブランとベール。そんな三人の気を知らずかネプテューヌが……。
「お、お兄様のスパッツをを見つけたから届けようとしてたのよ。」
「そうなの？それはお礼をしないといけないかなあ？」
すると兄の気が収まった、それに安心したネプテューヌは言葉を紡ぐ。そして
「そんなお礼なんて気にしないでお兄さまぶへうー！！」
上空を無様に舞っていた。そこに兄、いや阿修羅さえも凌駕した何かは追撃をする。
「穿て烈線！！」
「ちょっ、まっ！？」
「無限の剣星蒼窮を駆けろ！」
「げぼっ！！ぐぼらっ！？」

「ワンオフス・ディゾルヴァー！！」

「イヤー！！」

何があったかは諸君らで想像してほしい。ただ結果ノワール、ベール、ブランの前には

「回復アイテムキボンヌ……。」

そう言って倒れた紫色の何かがあった。

「「「ひぃ！？」」」

そして三人の女神達の前に立つ阿修羅さん。

「残念だけど気は収まったのではなく収束しただけなんだよね。さてねぇノワール？」

あからさまに身体をビクッと震わせる。そんなことはお構いなしに阿修羅さんはノワールに向かって歩き出す。ノワールは蛇に睨まれた蛙のごとく動けないでいた。

「お前ならこんな馬鹿な事しないと思っていたんだけどなぁー。まさかスパッツ、スパッツ連呼して闘いに参加するなんてねぇ。」

「ち、違うのお兄様私はただお兄様のスパッツを履きたくて（ネプテューヌから取り返して届けたくて。）。あ、本音と建前がぎゃくに！？」

阿修羅さんは無言でノワールを羽交い締めにする。

「えっ……！？」そのまま空中に飛翔する。もの凄いスピードで。さらに空中で物凄い早さで五回ほど回転する。

「うっ！？」

この時点で気絶するノワール。そんなことはお構いなしに物凄い勢いで地面にノワールは犬神家のごとく突き立てられる。（この一連の流れ仮面ライダー龍騎に登場する仮面ライダーベルデのファイナルベントを思いうかべてほしい。）
阿修羅さんは次の標的であるベールに目を向ける。

「お、お兄様私の話しを聞いてくぶわぁー！！」

そんな謝罪は無視してベールに蹴りと殴打の嵐を喰らわせる阿修羅さん。
ここからは音声のみでお楽しみ下さいね。

「奮えるぞ胸ー！！」

「ちょっ、まっ！？」

「燃え尽きるほど熱い！！」

「理不尽なー！！」

「刻みます。流星のスピリアー！！」

「ぐぼっ！？」

「君が泣くまで殴り飛ばす！！」

「ひどっ！？」

「銀色流星拳ー！！」

「も、もう無理ですわ……。」

「悪・即・爆発！！」

最後に残されたブランの前には爆発した何かが落ちてくる。

「あ、あぁ……！？」

怯えきったブランの前に阿修羅さんが舞い降りる。

「さてとブランお前は俺のスパッツをどうするつもりだったの？」

「……。」

最早ガタガタ震えだしてまともに口すら開けないブラン

それを見た阿修羅さんは小さくため息をつき、今まで赤くなっていた装甲を元に戻す。そして両手で拳を握りしめゆっくりとブランのこめかみに添える。

その瞬間ブランは自分が何をされるか悟り顔を真っ青にした。

『ぐりぐり』と物凄い音が聞こえた。そして高速で回転するユウの両手。そしてあまりの痛みで声すら出せないブラン。

「……！？」

「俺は言ったはずだけどね。口調のどうすれば良いかってね。」

「……！」

ブランの手からユウの手が離される。

「うめ…ぼし…はいや……。」

そう言って倒れるブラン。

そして四人の女神は目の前が真っ黒になった。

ユウｓｉｄｅ

今俺の前にはボロ雑巾の様になった妹達がいる。

「さてと仕上げと行きますか。」

妹達に転移に使う魔法陣を作り出す。

そこにイストワールから声をかけられる。

「本当にいいんですかこの娘達を下界に落として？」

それを手でせいする。

「それは言わない約束だよ、イストワール。俺は期待しているんだよね。この娘達が下界で成長することを。」

そう言って転移魔法陣を発動させ四人を転移させる。

「その為に今まで準備してきたんだからね。」

最後のつぶやきはイストワールには聞き取れなかった。

「……あっ、スパッツ返してもらうの忘れてた。」

そして奪われたスパッツ。今スパッツはネプテューヌの手中に。

怒りの赤、奪われたスパッツ！！（後書き）

次回は下界に落ちたスパッツ視点でお送りします。

堕ちたスパッツ、突き刺さる紫（前書き）

落ちたスパッツ視点もとい突き刺さったネプテューヌ視点です。

堕ちたスパッツ、突き刺さる紫

ネプテューヌｓｉｄｅ

どうしてこうなってしまったのか………。

私の愛するあの人が私の前に立ちはだかる闘いたくない貴方とはお願い、私を傷つけないで私をそんな目で見ないで私はただ、欲しいだけ。欲しかっただけなの。私は貴方の………。

そう貴方のスパッツがぁぁ！！

「はっ！？」

私は夢から目を覚ます。何か嫌な夢を見ていたような気がする。ただそれが何かは思い出すことはできないのだが。

「私はいったい………。駄目だ思い出せないや。」

自分のことが思い出せない。思い出そうとしても頭に霞がかかったようで思い出すことができない。

「ここは………。」

今の自分の現状を確認するために周りを見渡して見る。

レースのカーテン。ピンク色の壁紙など女の子の部屋なのは明らかである。だがやはり覚えがない。ただわすれているだけかもしれな

いが。　そんなことを考えていると、扉が開き女の子が入って来る。
「目覚めたですか？」
「うん。でもなんか嫌な夢見たせいで目覚めは最悪かな～。えっと……。」
「あっ、私の名前はコンパっていいます。」
「コンパだね。私はネプテューヌ。ねぷたん、ねぷちゃん、ねぷぴょん好きに呼んでね。」
目の前の少女コンパは少し考えるように頭を捻ると
「じゃぁ、ねぷねぷっていいます～。ところでねぷねぷはなんであんなところに突き刺ささってたんですか？」
「ん？突き刺さってたの私。」
「覚えてないんですか！？頭から地面に突き刺さってましたよ。」
「ごめんコンパ。私名前以外は何も覚えてないの。」
記憶がないことをコンパに説明する。
「記憶喪失ですか。だとすると地面に突き刺さった時のショックで……。」
コンパが思考の渦に入った為に手持ちぶさたになったネプテューヌはコンパを観察して見る。無論失礼などという気持ちなど一切なく。その内で最終的にネプテューヌの視線が辿りついたのはコンパの胸だった。
そんな露骨な視線に女の子であるコンパが気づかないわけがない。

「ね、ねぷねぷどうしたんですか？」
自分の身体を抱きしめ胸を隠すコンパ。
「うーん、なんかコンパのおっぱいを見ると嫌な感じがするんだよねぇ。コンパって妄想する？」
「も、妄想ですか？余りしないですよ。」
「うーん、なんか引っかかるんだよねぇ。」
「何か記憶の手掛かりになるかもしれませんよ。ねぷねぷ他に何かありませんか？」
「そう言われても簡単にはねぇ。ん？」
何かが懐の中にあるのに気づき引っ張り出すネプテューヌ。　出てきたのは……。
「「スパッツ？」」
そうネプテューヌの兄ユウのスパッツであった。だがネプテューヌはそんなことは知らない。
「んー私のかなぁ。それにしては大きいなー。」
スパッツを掲げてみるネプテューヌ。
「それ以前にそのスパッツ男ものですよ。ってねぷねぷ何してるですか！？」

コンパが驚くのも頷ける。ネプテューヌはおもむろにそのスパッツに顔を埋めて匂いを嗅ぎ始めた。
「スーハースーハー。」
コンパの声すら聞こえていないのかニヤニヤしながら嗅ぎ続けるネプテューヌ。　痺れを切らしたコンパがスパッツを奪いとるまでそれは続いた。
「ねぷねぷ女の子があんなはしたないことしたらいけないですよ。」
「うぅー。だってなんかあのスパッツ凄い良い匂いがしたんだもん。コンパも嗅いでみたら？」
「嗅ぎません！えへん、ところでなにか思い出しませんでしたか。……このスパッツで。」
「うーん、良い匂いがするのとなんだか懐かしい感じがするんだよね。」
ネプテューヌは何か大切な物を見るような目でスパッツを見る。
そしてそんなネプテューヌを見てドン引きするコンパ。
なんとも対照的な二人である。
おもむろにコンパの手からスパッツを奪いとるネプテューヌ。そのまま立ち上がりスパッツに足を通す。
コンパはただただ唖然としてネプテューヌの行動を見つめる。
「んー。やっぱり少し大きいかなっ！？おおー。」
何故かネプテューヌには大きはずのスパッツが何故かぴったりフィ

ットする。

「凄いよ、このスパッツ！！ねぇねぇコンパ見てよぴったりだよー。」

コンパにスパッツを見せつけるネプテューヌ。くるくる回ってみたりジャンプしてみたりと人の部屋だということを忘れてしまっている。

そんなネプテューヌを見てコンパは……。

（私がしっかりしなきゃです。）

決意をしていたようです。

ところ変わって場所はダンジョン。コンパが事前に調べた初級者向けの物。

コンパはさっきのスパッツの件よりも混乱していた。

「ふっ、他愛もないわね。」

ネプテューヌの姿が変わりダンジョンのボスキャラを圧倒しているのである。

「ねぷねぷその姿は？」

「さぁ、私にも分からないわ。ただ言える事があるとすれば……。」

「あるとすれば？」
「おっぱいが大きくなっているってことよ！！」
胸をはって自信満々に言うネプテューヌ。
それを見てコンパは　（やっぱり私がしっかりしなきゃです。）
改めて決意をしていたようです。

その後ボスキャラを倒した後ボスキャラが落としたアイテム　それが彼女達の未来を変える。

『ネプテューヌさんはじめまして。私はイストワール。貴女にたのみたい事があります。私は今悪い奴に捕まっているので助けて下さい。四つの大陸のそれぞれに私を助ける事が出来るアイテムの欠片があります。欠片は強いモンスターが持っています。ですからなんとかして下さい。』

この声（何故か棒読み）を聞いたネプテューヌは大陸を越えた冒険をすることになる。

それを聞いたネプテューヌはコンパに説明する。

「といわけなのよコンパ。」
「幻聴じゃないですか？」

冒険はまだ始まったばかりである。

堕ちたスパッツ、突き刺さる紫（後書き）

ネプテューヌのせいでコンパがしっかりとした常識人になってしまいそう。次回からはユウ視点に戻ります。それと感想をくれた方々本当にありがとうございます。次が投稿早く出来るようにがんばります。

遐迩のＩ．Ｆ．（前書き）

ユウがデレます。そしてあの娘と出会います。
※主人公は男の娘であると言うことを前提に見てくださいね。

邂逅のＩ．Ｆ．

ユウｓｉｄｅ

妹達を下界に落として数日。妹達の様子はいつでも確認できるようにしてある。　そんな時ひとつの問題が発生したネプテューヌの記憶喪失である。

「記憶喪失か。衝撃与えすぎたかな。」

「いえ、もっと消え去るぐらいは殺るべきだったと私は思いますが（。—。）」

いつの間にか現れたイストワールが話しかけてくる。

「消え去るぐらいって……。お前なんか怖いぞ。」

一瞬ヒヤッとした。

「もー。女の子にそんなこと言ったらだめなんですよ。」

プリプリ怒りながら俺の頭の上に小さい状態で座るイストワール。

「ところでネプテューヌさんの件私に任せてくれませんか？」うって変わって真面目な声で話しかけてるイストワール。

「ん？何をするつもりだ。」

少し心配でもある。こいつは俺を一番で考えて他の事をおろそかに

しがちなところがあるから。

「別に危ない事をさせるつもりはありません。ただ四つの大陸を冒険してもらうだけですよ。」

「な！？それは危険だろう！！」

「何を言ってるんですか？ネプテューヌさんならそこら辺のモンスター相手には負けませんよ。」

イストワールが落ち着いて下さいと促してくる。だがお前は大事な事を忘れているぞ。

「確かにモンスター相手ならね。だけど女神どうしでぶつかるとしたら危険すぎるだろう。あぁ、みんなが怪我したらどうしよう。やっぱり連れ戻すべきかな。」

イストワールはなぜか「たまりませんねぇ。」とかいいながら頭から降りて身体を大きくして椅子に座っていた俺の膝の上に向かいあう様に座る。　そして俺は抱き締められる。さらには頭を撫でられる。

「なんだかんだ言いながら貴方もブラコンなんですね。」

「な！？そんなんじゃない。ただ俺はあいつらが下界の人達に迷惑をかけないかどうか心配なだけでだな！！」

イストワールは抱きしめる力を更に強くする。

「そんな泣きそうな顔してたら説得力ないですよ。」

泣きそうな顔してたのか。

「心配って言ったら心配だよ。あいつらにお仕置きしたのだって少し反省してるしね。乱暴だったてね。」

イストワールを抱きしめ返してそう話す

「はう〜。そうですか。でも後悔はしてないんですか？」

顔を赤くしながらも聞き返してくるイストワール。

「うん。だってあいつらのことを思ってしたことだからね。」

「そうですよね。だったら尚更ネプテューヌさんいえ下界に降りた四人のことは私に任せてくれませんか？」

「んー。少し心配だけどイストワールがそこまで言うなら頼むよ。無論報告は定期的にしてね。」

「はい、勿論です。でもなんか貴方らしくありませんね。そんなに弱々しいとおそっちゃいますよー（^・^）」

俺の背中をわさわさとさわりながらニヤニヤと耳元で話しかけるイストワール。

「良いよ。」

「え？（。—。）」

「イストワールになら。」

イストワールｓｉｄｅ

今この人はなんて言った！？私の間違えでなければ襲って良いとにゃんにゃんしても良いとそう言いましたよね！！

「い、いいんですか？」

ごくりと唾を飲み込み目の前の最高のご馳走を見つめる。

「良いよイストワールになら。でも……。」

「でも？」

ここにきてやっぱり生理的に無理なんて止めて下さいね。そんなことになったら私立ち直れませんから。だがそれは私の予想を遥かに上回ったでもだった。

「でもそういう事初めてだからどうすればいいかわかんないよ。」

なにこの可愛い生き物？

「大丈夫です！！私の持ち得る全ての知識を持って貴方を快楽のドン底に叩きおとしますから。」

「？？？」

はっ！？いけませんここで下手な事を言ったら取り返しの付かないことに！？

「では目をつぶって下さいね。」

「う、うん。」

目をつぶるユウ僅かに赤らんでいる頬。　私の理性が決壊するのは早かった。

「ではいただきます。」

私は一旦距離を取り助走を付けてユウに飛びかかりました。

そして私は頭を殴打して気を失いました。

ユウｓｉｄｅ

「では目をつぶって下さいね。」

「うん。」

イストワールの指示通りに目を瞑ると頭の中に誰かの声が響いてくる。

『助けて。』

その声に俺は立ち上がり転移魔法を発動させすぐさま声が聞こえてきた場所に向かう。途中ゴーンと音が聞こえた気がしたが気にしなかった。

アイエフｓｉｄｅ

私は今窮地にたたされていた。簡単なクエストのはずだったのだがクエスト情報にはなかった大型のモンスター。わたしの好きなＲＰＧで言うならばキガントモンスターというのだろうか。今そのギガントモンスターが私の前にいるのである。

「いくら何でもこれはまずいわね。」

リーンボックス私が信仰している女神様グリーンハート様が守護する大陸。今回はそのリーンボックスのグリーンハート様からの依頼だった。無論グリーンハート様本人にあったわけではない。協会のうさんくさい教院長から頼まれたのである。

『グヴォー！！』

「考えている時間はないか。なんとか隙を見て逃げ出さないとね。」

だが逃げださす事など出来るのだろうか。そんなことにお構い無しにモンスターはその巨大な腕を振り降ろしてくる。

「くっ！？冗談でしょう腕振り降ろしただけでクレーター出来てるわよ。」

などと驚いていたせいかもしれない、モンスターの剣状の尻尾からの不意討ちに気付く事に遅れてしまった。

「しまった！？」

こんなところで終わるなんてと思いながらも、心の中で女神様に助けを求める。

（やっぱり女神様が私なんかの為に来てくれるわけないわよね。もう少しだけ色々して見たかったわね。）

諦めて私は目をつぶる。

おかしい。衝撃が痛みがいつまでたっても襲ってこない。

不思議に思って私は目を開ける。

そこにいたのは銀色に輝くとても綺麗な人いや、

「……女神様。」

ユウｓｉｄｅ

声が聞こえた場所に駆けつけると女の子が特大モンスターに襲われていた。名前をつけるとするならイヤンコック。

すぐさま俺はモンスターの前に立ち攻撃を菊壱紋字で受け止める。

「……女神様。」

あぁ、またそれか。　そんなつぶやきを聞きつつモンスターに向けて菊壱紋字を一閃する。そして胴体を真っ二つにする。
「凄い……。」
その声に振り向くと先ほどの少女が呆然といた表情で俺を見ていた。
「大丈夫だった？」
今できる最大現の笑顔で話しかける。
「は、はい。女神様のおかげでなんともありません。」
顔を赤くして少し緊張しているようである。ふと彼女の服の袖に血が滲んでいるのを見つける。
「ちょっとみせて。」
「は、はい。」
見てみると少し手の甲が切れていた。
すぐさま癒しの魔法をかける。
「癒しよ。うん、これで大丈夫。後はこれをまいてっと。よし。」
癒しの魔法をかけた後状態異常をなくすスカーフをての甲にまく。
「傷が！？あ、ありがとうございます。ところでこれは？」
「それは守りのスカーフ。どんな毒も痺れもそれがあれば守ってくれるよ。」
それを聞いて驚く少女。

「そ、そんな凄いもの貰えませんよ。」
「気にしないで良いよ。俺ももう一枚持っているから。」
ヒラヒラとスカーフを見せる。と余り長くいるとベールに気付かれるからそろそろ退散するかな。
「というわけで俺はそろそろ帰るね。あとこの辺のモンスターは一掃してあるから帰りは安全だからね。」
俺は飛び立とうとする。そこに少女が声をかける。
「あの貴方の名前を教えてください。貴方を名前で呼びたいから。」
「シルバーハートそれが今の俺の名前。君の名前は？」
「あ、アイエフです。シルバーハート様。」
「アイエフさんだね。また会えるといいね。では失礼するよ。」
そう言って俺は転移魔法を発動して天界に戻った。

アイエフｓｉｄｅ

あのあと私はダンジョンを抜けてリーンボックスの町に戻った。
戻ってすぐにとまっていた宿屋に戻り携帯電話のインターネットでシルバーハート様についてくぐってみた。
それでわかったこと。
ひとつ、シルバーハート様は余り人前には出ないため余り知られて

いない。だが何度か目撃されている。

二つ、その割には根強い人気がある。

そして三つ、男の娘である。

「まぁ、ネットで調べられるのはこんなことぐらいかしらね。」

私は携帯をしまうとひとつの決心をする。それは……

「シルバーハート様を信仰する！！そうと決まったらまずは仲間を集めないとね。ふふっ、待っていてくださいねシルバーハート様。きっと貴方を最高の女神様にして見せます。」

少女は決意したようである。

そんな少女に信仰されたシルバーハートは……。

「ご、ごめんイストワール。お願いだから泣き止んで。」

「私なんて私なんて死んだ方がいいんですー！！うわぁーん。」

慰めていたそうだ。

邂逅のI．F．（後書き）

トマト畑「ニヤニヤ。」

ユウ「なに感想みてニヤニヤしてんのトマト？」

トマト畑「いやあ感想もらえると嬉しくて。」

ユウ「まぁ、ありがたいけどニヤニヤするのは気持ち悪い。」

トマト畑「うっ。でも今回のイストワールとお前のほどではないぞ。」

ユウ「……／／／／。次回はスパッツもといネプテューヌとアイエフの出会い。上手くいけば黒い妹との再会までいきたいと思います。では失礼します。次回また会いましょう。」

トマト畑「トマトのセリフがー！！」

新たなる仲間ＬＥＤそして黒き妹。（前書き）

前回登場したアイエフが登場。やはりキャラ決壊ぎみです。
ちなみにネプテューヌいやもうスパッツでいいや。今回はスパッツ視点です。

新たなる仲間ＬＥＤそして黒き妹。

ネプテューヌｓｉｄｅ

プラネテューヌで鍵の欠片なるアイテムを手に入れたネプテューヌ。次なる大陸ラスティションを目指して大陸間をつなぐダンジョンを進んでいた。

「なーんだここのモンスター結構弱いね。これなら次の大陸なんてすぐについちゃうよ。」

「ダメですよねぷねぷ油断してたら足元すくわれるです。」

「大丈夫だって。もうコンパは心配症なんだから。それに私にはこのスパッツがついてるから。」

スカートをまくりあげ履いているスパッツをまるでいとおしいものように見つめるネプテューヌ。

そんなネプテューヌを見てコンパはやはりドン引きしていたようです。

そんな時

「？ねぇコンパ。あそこからなんか近づいてくるよ。ほら光ってる。」

そう言われてネプテューヌが指差した方向を見るコンパ。

「ほんとですぅ！？何かが物凄い勢いで近づいて来ます。キャー凄

い光ってます！？」

その光は物凄い勢いでネプテューヌとコンパ達のところに近づいてくる。

「ま、まさか宇宙人！？私たち食べられちゃうの！？スパッツ助けて！？」

なぜかスパッツに助けを求めるネプテューヌ。

「そんなの嫌です～。食べるならねぷねぷにしてください。ねぷねぷは男物のスパッツはいて喜ぶような変態さんですから～。」

泣き叫ぶコンパ。何気にキツイ。

そんなことはお構いなしに光はネプテューヌ達の目の前まで来て停止する。

「「まぶしいー！！」」

光の光量は凄まじく容赦なくネプテューヌとコンパの目を焼き切るかのようだ。

「「ギャー目がー！！」」

某大佐も驚く位の絶叫である。

その時……。

「何よ失礼ね。ひとの顔を見た瞬間悲鳴をあげるなんて。」

謎の光が言葉を発した。

だが……。

「「キャー！？」」
二人はあまりの眩しさに声を聞き取れていなかった。
「あぁ、ＬＥＤ消してなかったっけ。ごめんなさい今消すから。」
光が消えるそしてそこに現れたのは……。
「うわっ、なんか変な女の子が現れたよコンパー！！」
「ねぷねぷいきなり何言って……変な人がいますぅ～。」
身体全体を隠すようなコートを羽織った少女アイエフだった。ただその恰好がおかしかった。なぜか服装が全て銀色で統一されていた。そこはまだ良い。更に彼女をおかしくしているのは身体全体に付けているＬＥＤライトであった。
そんなＬＥＤアイエフが二人に話しかける。
「ここは貴方達みたいなふざけた娘がくる場所じゃないわ。すぐに帰りなさい。」
アナタにだけは言われたくはない。そう思うコンパとネプテューヌ。
ネプテューヌとコンパ、アイエフに事情説明中。
「四つの大陸にある鍵の欠片というアイテムを集めてイースンなる人物を救うね。……いいわ、わたしも手伝ってあげる。」
「「いえ、結構です。」」

二人の意見がまた一致する

「さてとついたわねラスティション。」

結局二人についてきたＬＥＤアイエフ。

「私がしっかりしなきゃですしっかりしなきゃです。」

がんばれコンパ。負けるなコンパ！

「ねぇアイちゃん。なんでアイちゃんは身体にライトをいっぱい付けてるの？」

みんなの疑問を代弁するネプテューヌ。

「あぁ、これ？」

そう言いながらまたもやＬＥＤをつけるアイエフ。

「「つけなくていいから（です）ー！！」」

やっぱりＬＥＤは眩しかった。

「ごめんごめん。これはね私の憧れの人に近づく為なのよ。」

「その人もライト付けてたんですか？」

コンパの問いに苦笑しつつ首をふるアイエフ。

「違うわ。その人はね輝いてたのとても綺麗に。とても強く、とても優しくね。私はあの人みたいに輝きたい。そう思ってこのＬＥＤ

を付けてみたんだけどまだまだみたいね。」
いや、もう十分輝いてるよ。ネプテューヌとコンパはまたもや意見が一致する。
「ねぇコンパ今日の宿を探しに行こう。」
「そうですね。暗くなる前に探しておきましょうか。」
そして話しを続けるアイエフを置いて走り出す二人。
「私とあの人の出会いは、ってどこにいくのよあんた達こらー待ちなさい！！」
走り出した二人に気づき追いかけるアイエフ。ＬＥＤの重装備にもかかわらず凄いスピードである。
「コンパもっと早く走って！！」
「む、無茶言わないでほしいです～。」
二人とも全力で走っているにもかかわらずじわじわとアイエフに距離を詰められる。
「逃げるなあー！！これでもくらいなさい。ＬＥＤフラッシュ！！」
「「ギャー！！」」
ＬＥＤの圧倒的な光量に悶絶する二人……いやその他大勢。
「あ、やばっ！？これって街中じゃご法度だった。」
この事はラスティションの七不思議のひとつとして語り継がれるのであった。

ノワールｓｉｄｅ

ところ変わってラスティションの協会。　ここにはネプテューヌと同様にユウによって落とされた妹の一人ノワールがいた。

「謎の発光事件？」

「はい、原因はまだ分かっておらず現在調査中です。」

今ノワールは協会の教員から定時報告をうけていた。

「わかったわ。調査が終わり次第報告をちょうだいね。」

そう言ってノワールは立ち上がる。

「どちらに？」

「部屋に戻るわ。何か急ぎの様以外は呼びたさないでちょうだい。」

「わかりました。」

ノワールは部屋に戻る。

「ふう。この部屋は落ち着くわね。まるでお兄様に包まれているみたい。」

ノワールはベッドに横になり部屋を渡す。その部屋はまるで異質だった。壁一面にユウの写真がところ狭しと張り巡らされている。

「お兄様。」

つぶやきと共にノワールは抱き枕を抱きしめる。その抱き枕にはユウが印刷されている。裏には女神化したユウが印刷されているという丁寧さ。抱きしめるのに満足したのかベッドから立ち上がりまるで恋する乙女の様な表情で部屋を見渡す。
だがとある写真が目にとまった瞬間ノワールの顔から表情が消える。その写真にはノワールの大好きなお兄様とノワール自身、そしてネプテューヌが写っていた。

「ネプテューヌ貴女のせいでお兄様と離ればなれに！！」

ノワールは自分の武器であるレイピアを壁の写真に向かって投げつける。レイピアは写真のネプテューヌを見事に突き刺していた。

「はぁはぁ。まぁ、いいわ。いずれ他の娘達ともケリをつける。ネプテューヌともその時に……。」

呼吸を落ち着かせた後ノワールは依頼クエストの一覧に目を通す。

「こういう時は気分転換にクエストでも受けるとしようかしら。」

しばらく一覧に目を通すノワール。

「これなんか良いかしら？」

ノワールの目にとまったのはダンジョンに迷いこんだ子供の救出。

偶然いやもしかしたらイストワールの仕業かもしれないがちょうどその時……。

「ねぇねぇコンパ、アイちゃんこれなんて良くない？迷子の子供の救出だって。」

ネプテューヌ達もそのクエストを選んでいた。

新たなる仲間ＬＥＤそして黒き妹。（後書き）

トマト畑「一応次回までネプテューヌ視点の予定です。」

ユウ「俺の出番がない……。」

トマト畑「次回のが終わればユウ視点だからね。」

ユウ「がんばります。」

黒との対決　ＬＥＤの光（前書き）

ＬＥＤ無双！！女神二人がついに対決します。書き終わった後見直して見て思いました。

ひとつ、なんてカオス

ふたつ、雑。

そしてみっつ、短い。

黒との対決　ＬＥＤの光

ノワールｓｉｄｅ

クエストは比較的簡単にすんだ。女の子をモンスターから助け出して親のもとへと届けた。それで終わりのはずだった。助け出した女の子とその兄の心配し、慰め、喜び合う。その一連の行動を見た時自分の兄である愛しいあの人のことを思い出した。

「……お兄様。」

少女を家族に預けた後先ほどのダンジョンに戻って来ていた。

「くっ、あれもこれも全てネプテューヌのせいよ！！本当だったら今ごろ天界でお兄様とコスプレ三昧だったのに！！」

ふとノワールの手がいや、身体全体が震えだす。

「まずっ！？こんなところで禁断症状が！？」

ノワールは懐に手を入れるとハンドタオルを取り出し、なぜか匂いを嗅ぎ始めた。

「スーハー、スーハー。」

禁断症状よく聞くのは麻薬、お酒なんかが有名であるがノワールは兄であるユウの禁断症状。定期的に兄であるユウより愛を補給しないと危険な状況に陥るのである。

「今は何とかコレクションのお兄様の下着やタオルなんかで持ちこたえているけどこのままじゃぁ危ないわね。ああもうこれも全部ネプテューヌのせいよ！！」
手近にあった岩を剣で叩き割る。
ドゴーン。そんな音と共に岩は砕ける。そんな時だった……。
ピカー！！
「「ギャー！？」」
謎の発光現象がダンジョン内で発生した。それと共に人の悲鳴が聞こえた。
ノワールの頭のなかで教員より報告があった発光事件が思い出される。
「新種の魔物っていう線もあるわね。それにさっきの悲鳴きになるわね。行ってみるしかないわね。たしか光ってた場所はあっちだったわね。」
ノワール移動中……。
「確かここら辺だったわね。ってまぶしい！？」
またもや起こる発光現象。
「イヤー！！アイちゃん待って、目がつぶれてしまうわ！！」
「アイちゃんＬＥＤはしばらく使用禁止って言ったばかりですぅー！！」

「あれって街の中だけじゃないの？」
誰かの話し声が聞こえる。っていうかこの迷惑きわまりない光は人が起こしているものなの！？信じられないわ。ちょっと注意しなきゃ気がすまないわ。

「ちょっと貴女達いくらダンジョンだからって人の迷惑も考えなさい。」

私は光を発している三人に注意する。

「ごめんなさいです～。すぐに止めるので待ってくださいですー！！」

「アイちゃん早くＬＥＤを止めて！！周りの迷惑よ！！」

「仕方ないわねぇ。」

光が収まる。

「「ごめんなさい。」」

私の前には丁寧に頭を下げる女の子とネプテューヌ。そして発光現象のおおもとである目がチカチカしそうな恰好の可笑しな少女。ん？ネプテューヌ！？

「ネプテューヌ貴女なんでここに！？」
するとネプテューヌは不思議そうに首を傾げる。

「私たちって知り合いだったかしら？」
その言葉に私は怒りを覚える。

「ふざけないで忘れたなんて言わせないわ！！貴女のせいで私は愛しのあの人と引き離されたんだから！！」

この時三人に電流が走る。

「ねぷねぷなんて酷い事を！？ねぷねぷはただの変態さんなだけじゃなくて悪人さんだったですねー！！」

「昼メロ的展開ね。ねぷ子あんたの立場は悪女ね！！」

「ちょ、ちょっと待ってコンパ、アイちゃん少しぐらい彼女の言葉を疑いなさい！！」

私の言葉に仲間割れしだす三人。団結力皆無である。

「ねぷねぷならあり得るです！！」

「あんた何か人の運命とか簡単に操れそうだもんね。」

俄然団結力を失っていくパーティー。

「コンパ私を信じて！！後アイちゃんはもう黙っていて。」

あんた達本当にパーティーなの？

必死に二人を説得するネプテューヌ。

それを見ながら私は小さく呟く。

「貴女が私の愛しいあの人のスパッツを奪ったからこんなことに……。」

小声で言ったはずなのに何故か、かなりの反応するネプテューヌ。
「私の事なんてどうでもいいわ。それより貴女スパッツのことを知っているの！？」
「ねぷねぷ自分の罪と向き合ってくださいです。スパッツに逃げないでください。」
「光が足りないわ……。こんな事ではあの人には近づけないわ……。」
あの銀色またライト付けそうよ。だがそんなことは気にしないでネプテューヌは剣を目の前に突き出して構えをとる。
「答えなさい！！このスパッツの事何を知っているの！！」
真剣な雰囲気なのだが……。
そんななか私は先ほどからの疑問をネプテューヌにぶつける。
「疑問を疑問で返す様で悪いけど、そういえば貴女プロセッサユニットがレオタードタイプからあの人と同じスパッツタイプに変わっているけど。まさか履いたの！？」
「えぇ。」
さも当然の様に胸をはって頷くネプテューヌ。
なんて……なんて羨ましい！！
「肌触りは！！」
「最高よ！！」

「匂いは！！
」
「嗅いだわ！！良い匂いよ！！」
「サイズは！！」
「ジャストフィットよ！！」
もはや語ることはないわね……。
「行くわよネプテューヌ！！貴女を倒してスパッツは頂くわ！！」
「かかって来なさい。だけど私は負けないわ！！」

そして私たちは斬り結ぶ。
「「スパッツー！！」」

その時コンパ、アイエフは……。
「また変態さんが増えたです～。」
「やっぱり髪も銀色に染めるべきかしら。」
かたや絶望。かたや意味不明であった。
そんななか二人の闘いは決着を見せようとしていた。ネプテューヌの疲労が半端ないのである。主にＬＥＤのせいで……。

「どうしたのネプテューヌ動きがダンチよ！！」

「くっ、このままじゃ確実に負ける！？」

苦々しい顔をするネプテューヌ。

「大人しくスパッツを渡せば見逃してあげるけど？」

「っ！？誰が！！」

剣でノワールを薙ぎ払おうとするがバックステップで避けられる。

「ねぷねぷ年貢の納めどきですぅー！！」

「コンパ！？私達パーティーよね！？助けてちょうだい！？」

まさかの裏切りのコンパ。

それを見てたいそう笑うノワール。

「ついにはパーティーにすら見捨てられるなんてね不様ねネプテューヌ！！」

「くっ！？」

コンパにすら見捨てられたネプテューヌだが……。

「やっぱりカラーコンタクトにするべきかしら、ん？何よねぷ子ピンチじゃない。ここは私に任せなさい。」

「「「え？」」」

思考の渦に入っていたアイエフは今までの流れを知るわけもない。故に……。

「ＬＥＤエネルギーチャージ！！」

身体中のＬＥＤに光が溜まりエネルギーが収束する。

「エネルギーチャージ８０％！！よし行くわよー！！」

爆発的な量の光がＬＥＤに充填される。

「カウント開始！！０、発射ー！！」

「「「それカウントの意味がギャー！？」」」

その瞬間爆発的な光がダンジョン内に放たれる。

そこで何があったのかを知るものはいない。ただ……。

「女神が負けるなんて……。」

「回復アイテムキボンヌ……。」

「こんなの嫌です～。」

誰かの戦闘不能の声と……。

「やった♪レベルが上がった。」

レベルアップの声が聞こえたそうな。

ユウｓｉｄｅ

「ラスティションで謎の高エネルギー反応！？」

「今至急調べています。」

「ノワール何もなければいいが……。」

（私としては消滅してくれることを祈ります。）

ＬＥＤの光は天界でも観測されていたそうな。

黒との対決　ＬＥＤの光（後書き）

何となくつくってみたレベル表。

ユウ　レベル９９９
ある意味振りきっています。

イストワール　レベル９９
ただし戦闘には参加出来ない。

ネプテューヌ　レベル２５

ノワール　レベル３０
コンパ　レベル２２

アイエフ　レベル７４（ＬＥＤをところ構わず発光させる為）

優しさの緑　ギルドＳＳＨ登場（前書き）

・注意事項
小説内で出てくるＭＭＢマークＩＩとはマルチプルメがビームランチャーマークＩＩの略称ですの。

今回は新キャラが二人でますの。いったいだれがでるんですの？

後この小説はやっぱりカオスなのですの。

後今回はスパッツ視点ではないですの。

ではどうぞですの。

優しさの緑　ギルドＳＳＨ登場

ユウｓｉｄｅ

今俺の状況を一言で言うならば寒い。
現在俺はルウィーにて絶賛遭難中。今回はこっそりルウィーを視察だけしてすぐに帰るつもりだったのだが雪山の魅力に負けてしまった。結果スノーマンを６８体もつくってしまった。
後にこのスノーマンがルウィー七不思議　になることをユウは知らない。

「しかしながら一面見渡す限り真っ白今日の夜はお鍋に決定します。」

転移魔法使う気力も魔力もないや。

「さてとどうしたものか？かまくらでも作るかな。」

そんな事を考えていると……。

『キャー！？』

何処からともなく女性の悲鳴が聞こえてきた。

「かまくらは後まわしかな。」

俺は悲鳴が聞こえてきた方向に走り出す。

ユウ移動中……。

「ここら辺かな？おっとこれはまたいっぱいいるな一気に決めるかな。」

女神化して一気に大量のモンスターを倒そうとするが魔物に囲まれている金髪の少女を発見する。

「下手に大技使えば彼女を巻き添えにしてしまう。まずは彼女を救うのが先決かな。」

俺は菊壱紋字と零刹那を鞘から引き抜き走り出す。

「はあああああ！！」

モンスターに視認出来ないスピードで走り出す。そしてすれ違い様にモンスターを連続で斬りつける。一気に金髪の少女のもとに辿り着く。少女はいきなり現れた俺に驚く。まぁ、当たり前か。

「大丈夫？立てますか？」

彼女に手をかし、立ち上がらせる。

「は、はい。ってあなたはまさか！？」

何故か少女は俺を見て何故かまたもや驚く。

「ん？ってまだこれ程の数のモンスターが！？君絶対俺の後ろから出ないでね！」

モンスターの数が更に増加する。致し方ない。女神化するしかないか。

「変身！！」

『ｓＥＴｕＰ』

俺の身体にプロセッサユニットが装着され女神シルバーハートへと姿を変える。

「プロセッサユニット装着完了！女神シルバーハート爆誕！！」

決めゼリフを言って腰に装着しているプロセッサユニットからＭＭＢマークＩＩを取り出し連射する。

「あぁ、やっぱりシルバーハート様……。生で変身シーンを見れるなんて。」

ん？俺の事を知っているのか？って今は目の前の敵に集中しなくては。ＭＭＢマークＩＩを連射し続ける。

「射つべし、射つべし！！」

だがいくら射っても全然敵は減らない。

「くっ！？何処から沸いてくるんだ子のままではじり貧だな。仕方ないあれ行ってみますか。」

「あれ？」

少女にも聞こえていたみたいである。

「君、俺今から少しおかしな事になるけどびっくりしないでね。」

「えっと……。は、はい。」

少女の返答を聞くと俺はＭＭＢマークＩＩの連射をとめる。
「さてと行ってみますか！！変身！！」
俺の掛け声と共にプロセッサユニットが解除されていく。残ったのは足の部分とスパッツスーツのみ。だがそれだけで終わりではなく残ったプロセッサユニットの色が緑色に変わって行く。そしてしまいには瞳の色まで緑へと変わる。
「うおおおおおおおおおお！！」
俺は咆哮をあげる。
「優しさの緑、シルバーハート・グリーンモード。」
「凄い新しい変身グリーンモード！？」
以前の怒りの赤と同様に感情の変化によってプロセッサユニットが変化する。
この優しさの緑はスピードに特化したタイプである。だがそれだけではないこの姿の真骨頂は……。
「行くぞ！？」
「えっ、うそ！？シルバーハート様がいっぱい！？」
そう質量を持った分身を作り出すこと。一人で大多数を相手にする際なんかにしようする。説明もそこそこに俺は全てのモンスターを全滅させる。
「……一人ぐらいほしいなぁ。」
そんな少女の独り言はさておき、俺は分身を消して女神化を解く。

フゥ〜。と溜め息をつき金髪の少女に話しかける。

「大丈夫？怪我はない？」

「は、はい！シルバーハート様のおかげで傷ひとつありません。」

元気な娘だなぁ。

「ところで悪いんだけど……。」

「はい、なんでしょうか？」

「街中までの道を教えてほしいんだけど大丈夫？」

「……えっ？」

ユウと少女移動中。

金髪の少女名前をフィナンシェと言うそうなのだが、フィナンシェの道案内のおかげでルウィーの街に帰って来る事ができた。

「いや、本当にありがとうフィナンシェ一時はかまくらで一夜を過ごすところだったよ〜。」

「い、いえ礼には及びません。こちらは命を助けてもらったんですから。」

「本当にありがとうフィナンシェでは俺は行くよ。あまりこの大陸にとどまっていると甘えん坊の妹に気づかれるから。」

俺は踵を返して帰ろうするだが……。

「待ってください！！」

フィナンシェに腕を掴まれ引き留められる。

「ん？どうかした？」

「あの一緒に来てほしいところがあるんです。」

来てほしいところ？　なにやらフィナンシェも真面目な顔をして真剣である。

「何処にいけばいいの？」

「よ、よろしいんですか！？」

一気にフィナンシェの顔が笑顔になる。

「構わないよ。可愛い女の子の頼みならね。」

などとおちゃらけて見る。

フィナンシェは顔を赤くしながらも俺に行ってほしい場所を言う。

「ルウィーに存在するギルドに一緒に来てほしいんです。」

・ギルド

その大陸に生まれながらもその大陸の女神様を信仰せずに別の大陸の女神様を信仰する人々が集まった集団それがギルド。このルウィ

ーにはそのギルドの拠点があると言われているがまさかそのギルドに実際に来る事になるとはな。
ギルドは地下にあり、いまはそのギルドの拠点の扉の前にフィナンシェと一緒に立っていた。

「ここからギルドの内部へと入れます。まあただの扉なんですけどね。ちょっと待ってくださいね。」

フィナンシェは扉にノックを二回する。すると……。

「合言葉を言うですの。」

中から声が聞こえてきた。合言葉？

「シルバーハート様は最高です！！」

「よろしいですの。入っていいですの。」

何その合言葉！？

俺はひきつった笑みを浮かべる。

「ちょっと待っていてください。」

フィナンシェは扉の中に入ると中にいる誰かと話す。

「フィナンシェ今日は定時報告の日じゃないですの。」

「えぇ、ですけど素敵な方をここにご招待したの。きっと貴女も気に入ってくれると思うわ。」

「いったい誰を連れて来たですの？」
「今呼びますからちょっと待ってください。どうぞお入りください。」
フィナンシェよりお呼びがかかる。
「わかった～、入るよ～。」
俺はギルド内部へと入いる。中を見ると唖然とした。まるでギルド内部はロボットなんかを開発している様な秘密基地だった。ギルドにこのような設備があるとはね……。
等と考えているとガチャンという何かが落ちる音が聞こえ何かが足元に転がって来る。
「これは薬草？」
転がって来たすり鉢の中身には薬草を練っている途中のものだった。転がって来た方を見るとにっこりと良い笑顔のフィナンシェ。そして目に涙を溜めた特徴的な帽子を被った少女ガストがいた。
「グスン、今まで何処にいたですの。ガストは貴方に会いたくて会いたくて仕方がなかっですの。」
「久しぶりだねガスト。」
「答えになってないですの。うぐっ。」
俺は今にも泣いてしまいそうなガストを優しく抱きしめる。

「うぐっ、また会えて、嬉しいですのシルバーハート様。ううっ、うわあああああああああん。」
「俺も会えて嬉しいよガスト。」

「へぇ～。ガストさんはシルバーハート様と一緒に旅をしていたんですか。」

「そうですの。シルバーハート様はガストがついていないと危なっかしくて大変でしたの。」

ガストとはフィナンシェ同様にモンスターから助け出したことがきっかけで知り合った。旅をしていたといっても二、三日だけであるが……。怪我をしていた為に近場にあった薬草を調合して手当てをした。回復魔法をかけたらよかったのでは？と思うかもしれないがその時は薬草なんかを調合するのがマイブームだったもので……。その調合を見ていたガストに何故か『弟子にするですの。』と押しきられ一緒に旅をしていた。

膝の上に座っているガストの頭を撫でつつフィナンシェに質問する。

「ところでここのギルドは君たち二人だけなの？」
「いえ、本当は１０人いるのですがみんなそれぞれの任務についているんです。」

「１０人だけ？」

「その他の大陸にも支部があって合計すると１０００人近いかと。」

「１０００人！？」
「ここは幹部会員Ｎｏ．１０までのみ人しかいないんですの。」
「会員？」
「フィナンシェ説明してないんですの？」
「ごめんなさい。忘れてました。」
おほん、と咳払いをしてフィナンシェは語りだす。それは耳を疑う話だった。
「このギルドの名前はＳＳＨ。正式名称は『シルバーハート様は私の嫁』というんです。」
「嘘だと言ってくれ。」
俺は頭を抱える。
「名前の通りシルバーハート様を愛し信仰するギルドです。因みに私ことフィナンシェは会員Ｎｏ．８です。」
「ガストは会員Ｎｏ．４ですの。」
フィナンシェが思い出したかのようにガストに尋ねる。
「ガストさんそういえば他の方々はいないんですか？いつもなら２、３人はいるはずですけど。」
ガストは首を捻ると……。
「ガストにもあの変な人達の事は分からないわですの。会員Ｎｏ．１はきっとそこら辺で歌っているんですの。」

「会員Ｎｏ．２のあの人はきっとまたどこかで光って迷惑をかけているんでしょうね。」

「あのピカピカ女はいない方が良いですの。会員Ｎｏ．３はきっとまた人助けでもしているですの。」

「会員Ｎｏ．５は嫁、嫁言って布教活動でしょうか？」

いったいこのギルドはなんなんだ！？

しばらくフィナンシェとガストにギルドの事を聞いた（目眩がした）後ギルドを後にして天界に戻った。ガストに泣きつかれたがまた来るといっておいた。逐一見に来ないとこのギルドは恐ろしい。

天界に戻るとイストワールがカードらしきものを見せて来たため見るとそこには……。

『ＳＳＨ会員Ｎｏ．６イストワール』

と書かれていた。何それ怖い。

優しさの緑　ギルドＳＳＨ登場（後書き）

またもや意味不明につくってみたＳＳＨ会員表

会員Ｎｏ．１　不明

会員Ｎｏ．２　不明

会員Ｎｏ．３　不明

会員Ｎｏ．４弟子のガスト

会員Ｎｏ．５不明

会員Ｎｏ．６デレデレイストワール

会員Ｎｏ．７不明

会員Ｎｏ．８まさかのフィナンシェ

会員Ｎｏ．９不明

会員Ｎｏ．１０不明

プロトタイプとＳＳＨの暗躍（前書き）

ここだけの話し最初ネプテューヌをプレイしたときシアンを男の子だと思っていた。ちなみに今回は短いです。ユウ視点です。

プロトタイプとＳＳＨの暗躍

ユウｓｉｄｅ

俺は今ラスティションに謎の巨大エネルギーの調査できている。だが特に成果もなくて天界に戻ろうと思ったのだがお腹が空いたためとある食堂にお邪魔しているところである。

少し古風な感じのする食堂、その扉を開けて中に入る。

「シアンご飯食べに来たよ～。」

声をかけると一人の少女が出てくる。

「シルバーハート様いつラスティションに来ていたんだよ？事前に連絡くれれば迎えに行ったのに。」

そう言って俺を見てくる赤毛の少女はシアン。以前まだノワールにラスティションの管理を任せてまもない頃に知り合った。以前このラスティションではアヴニールと言う大会社が産業の大幅を担っていた。だがアヴニールの社長であるサンジュは人間など信用出来ない、機械こそが一番などと考える人間であった。だがまだそれだけなら良いのだがこともあろうか展覧会の準備をしていたシアンを妨害しよとしてきたのだ。それを見かねた俺が身分を隠してシアンに協力して見事シアンを勝利に導いた。簡単に言えばこんなところである。後々ばれてノワールには説教をされ、シアンには驚かれた。

「ごめん、ごめん。今日はちょっとした野暮用で近くまで来てたんだ。ここにはお腹が空いたから来たわけ。」

それを聞くとシアンは溜め息をつく。
「……それでいつもので良いのか？」
「うんうん。鯖の味噌煮定食大盛りひとつね。」
「はいはい。」
そう軽く言うシアンの顔はどことなく嬉しそうだった。
「はい。おまちどおさま。」
ユウの前に鯖の味噌煮定食が出される。
「いただきます。」
そう言ってユウは食べ始める。
ユウ食事中……。
食事も終わりお茶で一息つくユウ。
そこにシアンが話しかける。
「で今日の本当の目的は？」
お茶を飲みきりシアンの問いに答えるユウ。
「本当にサバ味噌食べに来たんだけどな～。」
ジト目でユウを見るシアン。

「ごめん、ごめん。だからそんな目で見ないでよ。シアンに頼んだ例のあれどうなってるのかと思ってね。」

その返答にシアンはやっぱりかという顔をする。

「一応プロトタイプは完成した。実践は可能だ。」

「さすがシアンだな。」

そのユウの言葉に顔を赤くするシアン

「……馬鹿。でも本当に良かったのか俺にプロセッサユニットの情報を教えて。あれって女神の力の元になっているんだろ。」

「シアンだからこそだよ。一緒にがんばって来た仲だしシアンの事は信頼できるしな。」

更に顔を赤くしそっぽを向くシアン。

「ほらっ！！お前に言われ通りに作成した第二世代プロセッサユニットのプロトタイプだ。」

シアンはテーブルの上にベルト状の試作型プロセッサユニットを置く。

「デザインまで完璧に再現してあるな。早く試してみたいな。」

そう実はシアンにプロセッサユニットの作成を手伝ってもらっていたのだ。

「完成には後は実践データが必要だ。ここからはシルバーハート様の仕事だ。」
「あぁ、任せてくれ。」
俺は試作型プロセッサユニットを手に取る。
「さてと、プロセッサユニット渡したし、そろそろ仕事に戻るよ。」
そう言って奥に入って行くシアン。だがそのシアンの服のポケットからカード状の何かが落ちる。それをユウが拾いシアンに渡そうとするが、それに何故か見覚えがありついそれを見る。
それは
「ＳＳＨ会員Ｎｏ．９シアン……。シアンがあのギルドに！？」
俺のカードを読み上げた声にシアンはビクッと身体を震わせるといきなりユウに飛び掛かる。
「見るなー！！返せー！！」
「わ、わかった！？わかったから首締めないで。」
シアンはユウから会員カードを取り返すとそのままユウを店の外に蹴りだす。
「でてけー！！乙女の純情をもてあそぶなー！！」
バタン！！そんな音をたてて扉が閉められる。

「いったい俺が何をした！？」
鈍感なユウであった。

シアンｓｉｄｅ

「まさかあのギルドに入っている事がばれるとはな。あーめちゃくちゃ恥ずかしい！？」
シアンはひとり悶えているとポケットから音楽が流れだす。
「ん？ガストからか。はいもしもし。」
シアンはポケットから銀色の携帯電話を取り出し電話にでる。
『ガストですの。シアン例のものはどうなっているですの？』
その言葉に今までの事がなかったかの如く真面目な顔をするシアン。
「あぁ、完璧だ。今日シルバーハート様に渡した試作型プロセッサユニットにちゃんと仕込んでおいた。……隠しカメラを。」
『そう計画通りなのですの。今から興奮してきたですの。』
「『これでシルバーハート様のあられもない姿を隠し撮り（ですの）。』」
ギルドＳＳＨそれは犯罪だ。
そしてそれを知らないユウは
「やばいベルトって何かいいな。一日中付けていようかな。お風呂の時も付けたら駄目だろうか？」

危険な状態であった。

プロトタイプとＳＳＨの暗躍（後書き）

次回はお待ちかねスパッツ視点のラスティション編の終わりですよ。

まぁ、こんな作品誰も期待してはいないかもしれませんが。

絶望のコンパ　痴漢容疑者の黒（前書き）

すいません。報告が遅れましたが以前投稿したのは間違いで　今回投稿したのがスパッツ視点の続きです。本当に申し訳ありませんでした。ではお楽しみ下さい。

絶望のコンパ　痴漢容疑者の黒

ネプテューヌｓｉｄｅ

現在ネプテューヌ一行は協会にいた。無論ノワールも一緒にいる。

「で、ネプテューヌあんた何しに人の大陸に来たの？まさかスパッツを自慢しに来わけじゃないでしょうね。」

ノワールは椅子に座りながらテーブルに突っ伏しながらネプテューヌに問う。

「いくら私でもそれはないよ。じつはね……。」

ネプテューヌ事情説明中。

「いーすん？聞いたことないわね。それにしても……記憶喪失ねぇ。ある意味ライバルが減ったと言うところかしら。」

「ん？どうしたの女神様ニヤニヤして？」

「っ！？なんでもないわよ！？」

ネプテューヌに指摘されて慌てるノワール。

「ブラックハート様は鍵の欠片なるアイテムに覚えはないですか？」

コンパが問う。

「残念だけどないわね。」

「そうですか、だったら強いモンスターがいるダンジョンを教えてくれませんか？」

「それこそ山の様にあるわよ。ひとつひとつ回ってたら途方もない時間がかかるわ。」

「そうですか……。」

落ち込むコンパ。

「だったらさあやっぱり一個ずつ回って行くしかないよ。」

ネプテューヌが発言する。

「そうですね～。この旅いつになったら終わるんですか……。」

溜め息をつくコンパ。

そこにノワールが声をかけようとするが……。

「まぁ、がんばりなさ、うっ……！？」

急に顔を青くして痙攣しだした。どうやら禁断症状のようだ。だがそんなことを知らないコンパとネプテューヌは……。

「ブラックハート様どうしたですか！？」

「えっ、何！？大丈夫、女神様？」

「な、なんでもないわ……。私は部屋に……戻る……から。こんな時に限って……タオルが……くっ。」

そう言ってふらつきながら部屋に帰ろうとするノワール。戦闘の時にタオルを無くしてしまったようだ。

「だ、駄目ですよ！！ちゃんと病院にかからないと。」

「む……無駄よ。治らないわ……どんな……医者でもね。」

その言葉にはっとするコンパとネプテューヌ。

「……まさか、不治の病にかかっているのですか！？」

「そ、そんな不治の病だなんて女神様まだ恋してない友達もいない灰色の青春しか送っていないのに……。」

『何故ネプテューヌがそんなことわかるのよ。あなた記憶喪失なんでしょう。』とツッコミすることも、動くことすらままならなくなってきたノワールは必死に禁断症状を押さえられるものを探す。

（何か、何かないのお兄様の匂いがするものは……。っ！？あったじゃないのスパッツよ。ネプテューヌが履いているスパッツよ。あれさえあればよし！！）

残る力を振り絞ってノワールが立ち上がる。

「うわぁよみがえったー！？」

ノワールはまだ死んじゃいないぞネプテューヌ。

「ブラックハート様何か言ってるです？」
「……ッツよ」
「「？」」
「たりないのよー！！スパッツよー！！」
ネプテューヌに飛びかかりスカートの中のスパッツの匂いを嗅ぐ。
「ぷはあ！！生き返ったわあ。さすがスパッ「「キャー！？」」」
えっ！？」
「変態が変態さんがいるですよー！！」
「痴漢だ！痴漢されたー！！」
ノワールからすればお兄様分の補給かもしれない。だが端からみればただの痴漢行為である。
「待ってちがうのコレは！？」
パシャリ。
そんなカメラのきられる様な音がする。その音が聞こえた方に三人が振り向く。　そこには銀色の携帯電話を構えた今まで姿が見えなかったアイエフがいた。何故かＬＥＤライトを増設した姿で。
「いやいや良いもの撮れたわね～。これでブラックハート様の信仰はがた落ちね。」

顔を先ほどとは別の意味で真っ青にするノワール。三人から白い目で見られる。

「待って誤解よ！？何よその目は、いやそんな目で私を見ないでイヤー！！」

そんなノワールの肩にネプテューヌの手が置かれる。

「ネプテューヌ？」

「女神様分かってるよ、女神様はただこのスパッツが欲しかったんだよね？」

「……そうよ。」

「でもね。他の人たちがあの写真を見たらどんな顔をするんだろうね。」

ノワールの顔が真っ青になる。

「もしあの写真をばらまかれたくなかったら鍵の欠片探しに協力して。」

ちょっと黒いよネプテューヌ。

「もう好きにして。」

膝をつき絶望するノワール。

常識人のコンパならこの行為を止めようとするはずなのだが姿が見当たらない。

よくよく見ると部屋の隅でアイエフと話している。

「アイちゃん何でＬＥＤライト増えてるんですか？」

「だってコンパがお金くれたじゃない。それで買ったのよ。いや～。なかなか良いものがあったはラスティション。プラネテューヌとはまた違った良さだわ。」

その言葉に顔を真っ青にするコンパ。

「アイちゃん何てことをあれは今日の宿屋に泊まる為のお金だったですよ！！私達今日野宿するしかないじゃないですか。」

「大丈夫よ。そんなの気合いと根性の大合体でなんとかなるわよ。」

「なるのはアイちゃんとねぷねぷぐらいですぅ。」

膝をつき絶望するコンパ。

そこに女神ブラックハートを引きずりながらネプテューヌが声をかける。

「二人とも鍵の欠片探しブラックハート様も協力してくれるって。」

「そうなの？さっすが女神様頼もしいわね。」

アイエフとネプテューヌはニコニコと笑い合っている。その反対ノワールとコンパはというと……。

「お互いに苦労するわね。」

「もうこんなの嫌です～。」

「がんばりましょう。」

「……はいです。」

なんか通じあっていた。

その後すぐさまダンジョンにむかったネプテューヌ一行。すると偶然なのかはたまた作者のトマトの怠慢なのか鍵の欠片を持っているモンスターを発見した。

ネプテューヌが変身する前にノワールがもの凄く早いスピードでモンスターを切り裂き殴りとばし、アイエフがＬＥＤライトを発射する前にコンパがいつもなら考えられないほどの機敏さでモンスターの懐に入り注射器による射撃を零距離で打ち込みまくる。モンスターは力つきても止まることもない攻撃にさらされる。ガードブレイクがもう何度おこったことやら。

そんな二人の姿を見てネプテューヌとアイエフは

「「一体二人とも何があったんだろか？」」

そう呟いていた。

いやお前達のせいだからね。

そうしてネプテューヌ一行はラスティションの鍵の欠片を手に入れた。ノワールは写真を消去して解放された。モンスターを倒した時にでたお金でコンパ達も無事に宿屋に泊まることができたのであった。

そして別れの朝。
ノワールは、
「お願いだからもうこないで。」と言って目に涙を浮かべていた。
そんなノワールにコンパが声をかける。
「ブラックハート様私なんか後二つの鍵の欠片を見つけるまであの二人と一緒なんですよ。」
「まぁ、がんばりなさい。もし何かあったらコンパさん貴女だけでもラスティション協会で保護するから。」
「ありがとうですぅ〜。」
二人の間には友情が生まれた。
「では行ってきます。」
「えぇ、また来なさいコンパさんだけ。」
そしてネプテューヌ一行は旅立つ次なる大地、リーンボックスに。
そしてそこには……。
「素晴らしいですわ！！このお兄様の同人誌。買って正解でしたわ。やっぱりお兄様は女の子に無理矢理されるのが絵的に合っていますわ。」
スパッツネプテューヌと互角かそれ以上に危険な女神がいた。

絶望のコンパ　痴漢容疑者の黒（後書き）

この作品のノワールは兄であるユウの事を抜けば普通なんですよたぶん。
さて次回はユウ視点の試作型プロセッサユニットの初戦闘です。

際どい試作型　赤の布教活動（前書き）

今回は凄いぐだくだしてます。覚悟して見てください。
今回の注意事項。

一つ、小説内でイストワール（大）と表記していますがそれはイストワールが人の大きさになっていると言うことです。
二つ、主人公が男の娘と言う事を忘れないでください。

そして三つ、今回は今までにまして酷すぎるかもしれないので不快感を与えたらすいません。

際どい試作型　赤の布教活動

ユウｓｉｄｅ

現在俺は天界にてイストワールに呼び出されたところである。

「何か用イストワール？」

「実は貴方に渡したいものがありまして。これを……。」

イストワール（大）が銀色の携帯電話らしきものを手渡してくる。

ひっくり返して見ると大きくＳの印がついていた。

「これは？携帯電話？」

「それはＳギアです。まぁ、携帯電話みたいなものですよ。これが取り扱い説明書です。」

イストワールから更にＡ４サイズの紙を渡される。

「なるほどね～。おおインターネットまでできるのか。」

「では次にこの紙にサインとはんこをおしてください。」

俺はＳギアをいじりながらサインをしようとする。

「って何故にサインとはんこ？」

俺はその用紙を見てみる。

「……イストワールこれ婚姻届って書いてあるんだけど。」
イストワールはそっぽを向いて口笛をふく。ちゃんと吹けていないが。
「お前なあ……ってうわぁ！？」
イストワールに注意しようとすると突然Ｓギアが『ビービー』と音が鳴り出す。
「どうやら下界にてモンスターが出現したようですよ。場所はルウィー既にＳＳＨの会員Ｎｏ．５が戦闘に入っているようです。」
イストワールが俺と同じＳギアを取りだしてその画面を見て俺に告げる。
「なるほど危険なモンスターの出現場所まですらわかるとはかなり高性能だな。まあいい俺も行くか。」
シアンに頼んだ試作型プロセッサユニットも試してみたいしね。
「がんばってくださいね。それとこれを着て行ってくれませんか。」
イストワールから声援と謎の宝箱を受けとって俺はルウィーに向けて転移する。宝箱の中身はメイド服状のプロセッサユニットでどっかに投げすてた。いつの間にこんなものを？
「……そう言えば会員Ｎｏ．５って誰なんだろう。」
ユウ転移中

「到着したけどこの惨状はなに。ん？何か落ちてる。」
到着した場所は以前フィナンシェを助けた場所なのだが、そこには大量のモンスターの死骸とSギアがひとつ落ちていた。

「これはSギア？いったい誰が……。」
そんな時に『ズドン』と何かの音がする。

「今のは？考えていても仕方ない。いってみるか。」

ユウ移動中

そこではまたもや女の子がモンスターに囲まれて襲われ、いや襲っていた。

「ナニコレ。」

それはもうモンスターがかわいそうなぐらいに滅多打ちにされていた。そしてそれを行なっていた人物は……。

「REDちゃん！？」

その声に反応して振り向くREDちゃん。

「お？おおおー！！アタシの嫁のユウちゃん！！今そっちいくねー！！」

もの凄く早いスピードでこちらに駆け寄ってくるREDちゃん。その勢いで周りのモンスターが吹き飛ばされる。

「ユウちゃーん会いたかったよー！！」
真正面から抱きついてくるＲＥＤちゃん　を受け止める。
「うおっと！？相変わらず元気だね。」
ＲＥＤちゃんはそのまま俺の胸に顔をぐりぐりと押しつける。
「うんうん。アタシは元気だよ。でもユウちゃんに会えてもっと元気になれたよ。それにしても相変わらずユウちゃんは良い匂いがするな。アタシ発情してきたよ！！」
ハァハァと息を荒くするＲＥＤちゃんから俺は距離を取る。
「発情ってそこも相変わらずだね。」
ＲＥＤちゃんは普段こそ普通の女の子？　なのだがすぐに発情して襲いかかってくるのがたまに傷。
「ユウちゃんお願い！！チューさせて。」
「ちょっと、無理かな？」
「じゃあ、キスさせて！！」
「それ意味一緒にだからね。」
「じゃあマウストゥマウス！！」
「知ってた？息をしてる人に人工呼吸したら危険だって。」
「じゃあいいや！！もうやらせて！！」
「何を！？」

「何をってそれはセ……。」

「ダメそれ以上いったら危険だよいろんな意味で！！」

REDちゃんは頬を膨らませるとプンプン起こりだす。

「ユウちゃんは相変わらず我が侭だね。でもね。そんなところも大好きだよ！！」

何かこの娘疲れる。そう言えば……。

「REDちゃんこのSギアもしかしてREDちゃんのじゃない？」

俺が先ほど拾ったSギアをREDちゃんの前に差し出すとREDちゃんは目を真ん丸にして驚く。

「それはアタシのSギア！！ユウちゃんが見つけてくれたのか、ありがとうこれでユウちゃん大量の萌え萌え画像が救われたよ。モンスターに襲われた時に落としたみたいで。」

萌え萌え画像って、もう気にしないでおこうかだって……モンスターが待ちくたびれているみたいだし。

「さてと、REDちゃんはおいといて試作型プロセッサユニットを試すとしますか。」

俺はベルト状のプロセッサユニットを腰に装着する。

「おおユウちゃんが闘うのか！？」

REDちゃんが大げさに反応する。

「REDちゃんは俺が守るから下がっていて。」

俺がそう言うとREDちゃんは顔を赤くする。

「まさかのプロポーズ！？わかったよユウちゃん。式場の予約は任せておいて。アタシ、ウェディングドレスが着たいから洋風がいいな！！」

俺はいったいどこを間違えた？しばらくREDちゃんを説得する。その間モンスターさん達には待っていてもらう。

気を取り直して……。

「新たなるプロセッサユニットの力見せてやる。変身！！」俺は腰に巻き付いているベルトのレバーを回す。

『キター！！』と言うどこかで聞いたことのある声の電子音声と共に俺の身体にプロセッサユニットが装着されて行く。

「プロセッサユニット装着完了女神シルバーハートモードアサルト降臨……って何だこれはー！！」

俺は絶叫した。何故ならば……。

「これちょっと露出が多すぎだろ！？それに何故にスカート！？」

普段のプロセッサユニットもかなりきわどいがこれはその領域を遥かに凌駕してしまっている。

スパッツスーツはいつもより少しばかり短い膝の上３ｃｍ。しかも何故かミニスカート。上着はノースリーブ、スカートはピンクそれ以外の色は銀色なのは変わらない。シアンは何がしたかったんだ。それよりも、もう一つ文句を言うべきところがある。無論さっきの電子音声についてである。

「イストワールだよね？」

『……！？』

「えっと、何やってるの？」

『チガイマス。ワタシハチョウコウセイノウエーアイデス。』

もういったいどうすればいいんだろうか。ツッコミ所が多すぎるよ。

「ユウちゃん。」

そんな時ＲＥＤちゃんが微笑みながら話しかけてくる。

「ＲＥＤちゃんどうかした？」

「私もう我慢できぶへぶー！！」

身の危険を感じてＲＥＤちゃんをお星さまにした俺は悪くないはずだ。

「アタシはユウちゃんが大好きだー！！」

さよならＲＥＤちゃん……。

『グォー！！』

あぁ、あまりにもいろいろなことがありすぎてモンスターさん達のこと忘れていた。

「まぁ、いいか。さあ闘いますか。」そう言って俺はベルトのレバーを回す。

『ドリルキター！！』

その電子音声と共に俺の右腕に大型ドリルが装備される。

「おおおー！！ドリルは男の子ロマンだね～。ではさっそく……。」

俺の目の前に来ていた大型モンスターをドリルで貫くその結果……グロい。

「ううっ！？気を取り直してレバーを回してっと。」

『センヂャイ！？』

「……？」

『……センシャキター！！』

噛んだんだね。

俺の足に戦車のキャタピラが装備される。

「意外に使いやすいなこれ。よっと！！」

キャタピラで一気にモンスターの中に入り蹴りあげる。

「これまたえげつない。さてと……。」

もう一度レバーを回す。

『ツインテールキター！！』

何故か髪型がツインテールになる。それ以外の変化なし。

「何かの間違いだきっと、うんもう一度レバーを回してっと。」

『トドメキター！！』

え？トドメ！？

俺の胸部に大型のバズーカが装備される。

「おおこれは分かりやすい。」

『カウントシマス。ゼロ、ハッシャ。』

なにっ！？カウントの意味がない！？あれこんなの前にもあったような？

『ドカーン』とそんな音と共にモンスターが消滅する。

「凄まじい威力だけど地面までえぐってるぞこれ。やばいな誰かが来る前に逃げないと。」

俺はすぐさまプロセッサユニットを解除して天界に転移した。後にルウィーにできた大穴はやっぱり七不思議として数えられるようになったとさ。

場所は変わって天界。ユウはイストワールにＳギアをＲＥＤちゃんが持っていたことについて聞きに行っていた。

「イストワールもしかしてＲＥＤちゃんもＳＳＨなのか？」

「ソウデスヨ。カノジョハカイインナンバーゴデスヨ。」

「……。」

「ドウカシマシタカ？」

「イストワール電子音声のままだよ。」

そう言って俺はイストワールのもとを立ち去った。とりあえずがんばってイストワール。

その頃吹き飛ばされたＲＥＤちゃんは……プラネテューヌにいた。しかも何故かネットカフェにいて布教活動を行なっていた。何故にネットカフェかと言うと……。

「よしよしあの際どい変身の動画を投稿。これでまたユウちゃんの人気がますぞ。」

彼女の行う布教活動とは某動画サイトにユウことシルバーハートの動画を投稿することである。

無論ＳＳＨ公認である。他にもシルバーハート様フィギュアやマグカップ、うちわ等のグッズを売ったりもしている。だがユウ本人は知らない。

「おおー！！凄いまだ投稿して三十分もたってないのにもう一万アクセスだよ！！これで私の嫁がさらに有名になるね。よーしグッズ

売りに行くぞー！！」

彼女の布教活動はまだまだ続くのであった。

際どい試作型　赤の布教活動（後書き）

会員Ｎｏ．５はＲＥＤちゃんでした。彼女のキャラがなんかネプテューヌとかぶっている気がする。
それとあの試作型プロセッサユニットについては酷すぎるかもしれない。
名前は何にしよう？何か良い名前があったら教えてください。

メイドな紫　聖地リーンボックス（前書き）

今回はやり過ぎました。ベールとリーンボックスのファンの方は回れ右でお願いします。

メイドな紫　聖地リーンボックス

ネプテューヌｓｉｄｅ

現在ネプテューヌ一行はリーンボックスに繋がるダンジョンに来ていた。

「やっぱりここのモンスターもたいしたことないわね。もう出口よ。」

「ねぷねぷ油断大敵ですよ。前回の事を思い出してください。今回は……。」

コンパは黙って隣にいる危険人物を見る。

「そうだったわね。アイちゃんＬＥＤライトは二度と使わないでってギャー！？」

アイエフの方からネプテューヌの居る地点に向けて収束した光が集まる。その収束した光はネプテューヌの目を直撃した。

「ねぷねぷ！？アイちゃんＬＥＤライトを止め……あれっ？私そこまで眩しくないですよ。」

よくよく見ると光はアイエフのＬＥＤライトからではなく掲げた右手から出ている。

「これはトレジャーサーチって言う私の能力なのダンジョンの隠れているレアな宝箱を見つけることができるの。」

「へぇ～。アイちゃん宝箱は何処にあるんすか？」

「あぁ、ねぷ子の足元に「説明は良いからまずは止めて頂戴！！」
あぁ、ごめん、ごめん。」
光がやみ膝をつくネプテューヌ。
「まさか本当にやられるなんて油断したわ、私の馬鹿！！まだ目を開ける事が出来ないわ。良い子のみんなは光を人の目に当てちゃ駄目よ。あぁー！！目が痛い！！」
悶えるネプテューヌ。そんなネプテューヌをコンパは見なかったことにして宝箱を探す。
「アイちゃん宝箱ないですよ。」
ネプテューヌのいたところを探すコンパだが見つけることができるない。
「あぁ、ごめん。もう一回するわね、ってしばらくしないと使えないんだった。よし。ＬＥＤライト発光開始。」
「えっ？キャー！？」
その瞬間コンパは光に包まれた。
しばらくして光がやみそこにあったのは悶えて地面をのたうち回っているいるネプテューヌとふらつきながらも立っているコンパそして宝箱がひとつあった。
「もう私は負けないんです。負けたくないんです！！」

「何の話よ。あ、コンパ足元危ないわよ。」
ただでさえLEDライトのダメージを受けてフラフラなコンパは足元にある宝箱に気づかずに足を取られて空中を一回転して転ぶと言う妙技を見せる。顔面を打ち付けたが大丈夫だろうか？
「大丈夫じゃないですぅ～。」
仰向けに倒れているコンパに地面をのたうち回っているネプテューヌが近づくそして見事に……。
『ごつん。』
互いのあたまが衝突する。
「「ギャー！！」」
「たくっ、何やってるのよ先がおもいやられるわね。」
その言葉に悶えていた二人が立ち上がる。
「「いい加減してー（ですぅー）！！」」
それはそれはとても見事なツッコミだったそうだ。
それでは気を取り直して……。
「宝箱これね。開けて見るわね。」
「何かお金に替えられるものだったらいいんですけど。」

「案外モンスターがー！！ってことも。ねぷ子貴女のことは忘れないわ。」

現実的なコンパ、非道なアイエフ。

「こ、これは！？素晴らしいいいいー！！」

宝箱を開けたネプテューヌから驚嘆の声が上がる。

「何が入ってたですか？」

「何モンスターの死骸でも入ってたの？」

「なんで私がモンスターの死骸で喜ぶのよ！？ちがうわこれよ。」

ネプテューヌが手にしていたのは……。

「「何故にメイド服！？」」

そうメイド服だった。それも古風な超純情ロングスカートのメイド服だ！！（一応プロセッサユニット扱い）

「しかも私専用装備よ！！これはさっそく……。」

ネプテューヌ着替え中……。

「自分の才能が恐ろしいわ。どんなものでも着こなしてしまうんだから。まぁ、いいわ。さあリーンボックスに向かいましょう。」

ネプテューヌが淡々と語る。

「まつですねぷねぷ。その恰好で行くつもりですか！？」

「えぇ、何か問題があるのかしら？」

「大問題ですよ。アイちゃんだけでも白い目で見られてるのにねぷねぷまでそんな恰好したら私達危ない集団として見られてしまいますよ！！」

「あらコンパ私の美しさに嫉妬？女の嫉妬ほど醜いものわないわよ。」

ネプテューヌクスクスと笑う。そのネプテューヌの態度にコンパは頬を膨らませるて怒る。

「もういいです！！ねぷねぷなんて補導されればいいんです！！」

すたすたと歩き出すコンパ。負けるなコンパ。がんばれコンパ。

そしてネプテューヌ一行はダンジョンを出てリーンボックスに向かう。

みなさんはリーンボックスの事をご存知だろうか？雄大なる緑の大地と呼ばれ中世ヨーロッパを彷彿とさせ、自然も多く四大陸のなかでも比較的過ごし易い大陸と言われ、シルバーハートが管理していた。　その後その妹グリーンハートによって管理されていた。それが間違いの始まりだった。

リーンボックスは変わってしまった。中世ヨーロッパを彷彿とさせたお城は打ち壊されゲームショップ、同人誌販売店等が立てられた。

さらには住んでいた人も老後の生活をする老人や新婚生活を送る夫婦は激減し、アニメやゲームをこよなく愛する通称オタク達が激増した。自然が多く残されていることが唯一の救いである。

今のこの大陸は雄大なる緑の大地などではなく言うならば……。

萌えとオタクの聖地リーンボックス

そう呼ばれていた。

そしてネプテューヌ一行はそのリーンボックスの大地に立っていた。

「わ、私が聞いていたリーンボックスとは全然違いますぅ。」

困惑のコンパ。それに答えるアイエフ。

「コンパが知っているリーンボックスはシルバーハート様が管理していた当時のものね。今のリーンボックスは女神グリーンハート様管理しているんだけど……。」

アイエフは周りを見渡し溜め息をつく。

「ここも変わってしまったわね。どうして私あんな女神様信仰してたんだろ。」

そんなアイエフを見てコンパは関わるとめんどくさいと思いスルーした。

「アイちゃん協会にいってみませんか？」

「そうね。……そう言えばねぷ子は？」

辺りを見渡して見るとゲームショップの店頭でゲームをプレイして

いた。だが何やら様子がおかしいゲーム画面に向かって何やら叫んでいる。

アイエフとコンパが近づき、何を言っているのか確認して見る。

「どうして！！どうして分かってくれないのお兄様、私はこんなにも貴方を愛してるのに！？」

「ねぷねぷがおかしくなったですぅー。」

コンパが涙目で呟く。

「違うわ。これは今大陸中で大人気のゲーム『お兄様は男の娘』って言うゲームよ超高性能ＡＩ搭載で実際に中にいるお兄様と会話できるのよ。ねぷ子は今バッドエンド一直線ね。」

アイエフがコンパに説明している間にもネプテューヌはゲームを続けていく。

「いや、お兄様捨てないでそれだけは嫌なの！！なんでも言う事を聞くからお願い！！待ってお兄様何処に行くの、待って行かないで！！イヤー！！」

画面に浮かぶＧＡＭＥ　ＯＶＥＲの文字そして絶望するネプテューヌは膝をつき拳を地面に打ち付けるネプテューヌ。

「くっ！？何故、何故なの何故お兄様は！？」

「ねぷねぷ恥ずかしいですから早く行くですぅー。所詮ゲームの中の話しです。」

コンパが膝をついているネプテューヌを無理矢理引っ張って行き連れて行く。

「お兄様ー！！」

ネプテューヌの絶叫がリーンボックスにひびいた。

しばらくしてネプテューヌも立ち直り協会についたのだがそこで問題が発生した。

「あぁ、困りますお客様協会にその様な恰好で入られては。」

そう服装について注意された……コンパが。

「どうして私が注意されるですか！？」「あぁ、言いわすれていたんだけどこのリーンボックスではコスプレこそが正装なのよ。そう言えばコンパ看護学校の制服があったじゃないあれを着れば良いんじゃない。」

「恥ずかしいですぅー！！」

嫌がるコンパ。

「お客様あまり騒ぐようだと警備員を呼ぶ事になりますが？」

そんなコンパに協会の教員が睨みをきかせる。

「コンパ……確かに補導されそうね貴女がね。ふふっ。」

ネプテューヌがクスクスと笑う。

「……こうなったらもうやけですー！！」

コンパ着替えもといコスプレ中。

「ではグリーンハート様が参られるまでこちらでお待ち下さい。」

現在ネプテューヌ一行は応接間にてグリーンハートを待っているところである。

話は変わるが今のネプテューヌ達の服装を確認しておこうか。

アイエフはいつも通り。

コンパは看護学校の制服。

ネプテューヌは女神化してメイドプロセッサユニット装備。無論スパッツ装備済み。

「失礼しますわ。貴女達かしら私に会いたいとおっしゃっている……ネプテューヌ！？貴女なんでここに！？」

グリーンハートことベールが応接間に入って来ると同時にネプテューヌの存在に驚く。

「でたわね乳お化け！！」

「ねぷねぷいきなり何を言っているんですか！？」

いきなりの暴言のネプテューヌにコンパは驚愕する。

「相変わらずですわね貴女。まぁ、いいですわ。ところでネプテューヌ貴女スパッツ持っていますわねいますぐに渡しなさい。」

「やはり貴女の狙いもスパッツなのね。悪いけど渡すつもりはないわ！！」

一触即発の空気

「まぁ、いいですわ。だったら勝負しませんこと？」

「勝負？面白そうね受けて立つわ。」

ネプテューヌは剣を取り出そうとする。

「お待ちなさい。誰も戦闘で決めようとは言っていませんわ。」

「だったらどうするつもりよ？」

「そこでこれの出番なのですわ。」

ベールがその言葉と共に取り出したのは

『お兄様は男の娘で弟！？』

まさかのゲームソフトだった。

メイドな紫　聖地リーンボックス（後書き）

今回はベールの恐ろしさをしったね。

ユウ「いったい何があったんだ？」

まぁ、いろいろとね。そう言うユウは？

ユウ「俺は……まぁ、ちょっと。」

教えてくれないの？

ユウ「いずれわかるよ。」

まぁ、いいや。ところでみなさんは幼女が好きでしょうか？もし好きな方は感想にでも良いので好きか嫌いか書いてくれると嬉しいです。

ユウ「何をするつもりだ？」

ではみなさん失礼しました～。

最強の青髪　語る銀と嘔吐（前書き）

今回はＳＳＨ最強のあの人が登場します。

駄文なので気をつけて見てください。

最強の青髪　語る銀と嘔吐

語り手イストワールｓｉｄｅ

話しをしましょう。これはまだユウが女神になってまもない頃。ユウは一人の少女と出会います。

イストワールいきなりどうしたんだ食事中に語りだすのはマナー違反だぞ。

少女には夢がありました。でも少女は臆病で引っ込み思案さらには根暗で引きこもりと言う典型的な駄目人間でした。

誰の事かは知らないが言いすぎだろ……。

でも少女は変わります。運命的な出会いを果たして……。これはそんな出会いの物語り。

こんなキャッチフレーズどこかで聞いたような？

では出会いの書を紐解きましょう……。うわぉぇぇぇ～。

うわっ！？食事中に吐くなよ！！なんか本が出てきた。

さあ紐解きましょう……っ！？

どうしたイストワールいや語り手さん？

久しぶりに出したら……本当に……でそう…で。

まさか！？ちょっと待て責めてトイレで吐いて。あぁ止めろなんでこっちに来るー！！

一緒に汚れましょう。うおぇぇぇぇー！！

止めろぉー！！

５ｐｂ．ｓｉｄｅ

ボクの名前は５ｐｂ．ストリートミュージシャンなんかをしているんだ。これでも少しは有名なんだ。けっして引きこもりでも根暗でもないよ。そんなボクにはもう一つの顔があるんだ。それはギルドＳＳＨシルバーハート様は私の嫁の会員Ｎｏ．１しかも設立者で会長なんだ。どうしてそんな事をしているのかと聞かれるとあの人ユウ君……。じゃなくてシルバーハート様との出会いから話さないといけない。そうあれは雲ひとつない快晴の日だった。

その頃のボクは極度の恥ずかしがりやで人前で歌う事なんてできなかった。そんな時にどこからかとても綺麗な歌が聞こえた。

「いったい誰が……。」

ボクは気付くと走り出していたその歌の聞こえたところに向かって。

「……！」

魅了されてしまった。その唄を奏でる柔らかそうな唇に艶やかでサラサラと銀色に輝くストレートの髪に金色に輝く瞳に。彼をシルバーハート様をみた瞬間にボクの全てが奪われてしまった。

気付くと彼は歌い終えたのかどこかに行こうとする。ボクは彼を何故か引き止めていた。

「あっ、あの……。」

彼が振り返るその目は何故か悲しみに満ちていた。

「……なにかよう？」

「えっと、その、唄凄く綺麗だった……。」

心の中ではいっぱい言いたい事を考えていたはずなのに口から出てきた言葉はそんな言葉だった。

「そう、ありがとう。」

その言葉と共に彼の顔が笑顔になる。

「……っ！？」

その笑顔にボクは心臓を鷲掴みにされた。

「どうしたの顔が真っ赤だよ。」

首をコテンと傾ける彼、その仕草はとても可愛らしかったと言っておこう。

「な、ななななんでもないです。」

「そう？ならいいんだけど。」

彼が穏やかな顔になったのを見てボクは彼に問う。

「あ、あのどうしてそんなに悲しそうなの？」

その瞬間彼の顔がきょとんとあっけにとられたかのような顔になる。その仕草もとても可愛らしかったと言っておこう。

「……ああ。別に大したことじゃないよただ幸せになれなかっただけだから。」

そう語った彼の顔はまた悲しみにつつまれていた。

「幸せになれなかった？」

「みんなに唄をきいてもらえなかった。みんなを……幸せにすることが……。」

彼の唄が人を幸せにすることが出来ないはずがない。少なくともボクは……。

「ボクは君の唄で幸せになれたよ。ボクに君を幸せにする手伝いをさせてほしいんだ。」

「……！？」

彼の顔がまたもや驚きに包まれた。

「あのね君の唄はとても綺麗なんだ。でもねここの通りは今の時間は人通りがとても少ないんだ。歌うんだとしたら向こうの通りのほうが良いんだ。」

ボクはそう言ってこことは反対の道を指差す。

「それにボクなんかのじゃ悪いかもしれないけど……。」

そう言って私は自分の相棒を取り出す。

「エレキギター？」

「そうだよ。これでも少しは変わってくるはずだよ。」

ボクは彼にエレキギターを取り出して見せる。彼はそれはキラキラとした目で見る。くちゃくちゃ可愛いとだけ言っておくよ。

「それじゃあ行こう！！」

ボクは彼の手を引っ張り連れ出す。いつものボクならこんな事は出来ないと思うよ。でも彼と一緒ならなんでも出来るそう思えた。

「ま、待って。」

彼から声をかけられる。

「どうかした？」

「君の名前を教えて。」

そう言えば言ってなかったっけ。

「ボクは５ｐｂ．君の名前は？」

「……ユウ。」

「そう。じゃあ行こうかユウちゃん。」
彼の名前を呼ぶと彼は何故かむすっとした顔をする。何か気にさわることをしたのだろうか？今考えると明らかだったんだけど。
「ユウちゃんじゃなくてユウ君俺は男の子。」
え？
「……えー！！」
ボクの絶叫は人がほとんどいない通路によく響いた。
とりあえずユウ君がどこからか持ってきたビール瓶のケースの上に乗って歌う準備をする。ボクはそのままギターを準備してチューニングを行う。ふと周りを見回して見るとちらほら人が集まっていた。それも仕方ないと思う。ユウ君はみんなの目を惹く美しさだしね。本当に男の子なのかな……いや確かこんな言葉があったな『こんなに可愛いい子が女の子なわけがないきっと男の娘だ』そうかユウ君の性別は男の娘なんだ。
「準備できた？」
そんな馬鹿な事を考えていたときユウ君より声が掛かる。
「うん。いつでも良いよ。」
ジャラーンと一度弦を弾いて見せる。
「じゃあいくよー！！」

その言葉と共にボクはギターを弾く。譜面を見る必要はない。ユウ君が歌う唄はどれもマイナーな曲ばかりなのですべて頭の中に入っている。ボクは前奏を弾きだす。やっぱりギターだけだといろいろ限られてくるね。だけどユウ君の唄はそんなボクの迷いさえも軽く打ち消していく。
奏でられるその旋律によって人々はまたひとりと立ち止まりユウ君にユウ君の唄に魅了されて行く。
「～♪」

ボクのギターさえも呑み込んでいまいそうである。ボクはそんな中でも楽しんでいた。とても楽しかった。でもそんな楽しい時間は長く続かない。ユウ君の唄がとまる。
辺りが沈黙に支配される。ユウ君が不安そうな顔で周りを見回す。でもそんな心配しなくても良いと思う。だって……。

『良いぞお嬢ちゃん達ー！！』

『感動したー！！』
『私は君に心奪われたー！！』

『キャー！！ステキー！！』

ユウ君の唄が心に響かないはずない。ほらこんなにも多くの人達を魅了してしまったのだから。

ユウ君は笑顔でボクの手を取りもう片方の手で人々に手をふる。その後観客のアンコールに答えて１０曲近く歌った。

「今日はありがとう５ｐｂ．ちゃんおかげで楽しかったよ。」

「ボクは何もしてないよ。ユウ君唄がみんなに届いたんだよ。ボクは何もしてないよ。」

不意にユウ君の手が伸びてくる。

「えいっ！！」

「ユウ君にゃにするのー！？」

頬をむにゅむにゃと引っ張られる。

「おお！！やわらかい、よく伸びるー。」

「うにゅー。えいっ！！」

ボクもユウ君の頬を負けじと掴んで引っ張る。

「「うゆー。……ぷっ、あはは。」」

二人とも互いの可笑しな顔に耐えきれずに笑ってしまう。

「なんだちゃんと笑えるんだ。可愛い笑顔だね。」

「っ！？からかわないでよ～。」

ボクなんかが可愛いわけないよ。

「今ボクなんかがって思わなかった？」

「……！？」

どうして……。

「その言葉は君の可能性を無駄にしてしまう。」

「可能性？」

「そう可能性諦めてしまえば可能性もゼロになってしまう。だから……！？」

ユウ君が話しの途中で急に顔色を変える。

「ユウ君？」

「ごめん俺いかなくちゃ。」

「また会える？」

ボクは悲しみを隠しきれない顔でユウ君に聞く。するとユウ君はボクの頭を軽く撫でる。

「５ｐｂ．ちゃんがのぞむならね。じゃ、またね。」

そう言ってユウ君は走り出していった。そしてボクの心を奪いさっていった。

それからしばらくして帰路に帰っていると一筋の光が天に向かって行く。そしてその光の中に彼がいた。

「ユウ君！？」

辺りが騒がしくなってくる。無論みんなあの光を見たせいだろう。

『おおー！！あれは伝承の女神さまじゃ！！』

『そうよあれが銀色の女神様なのよ！！』

女神さま。それがボクの中に響いてくる。まさかユウ君が！？でもなんでだろう不思議とあまり驚かないだって彼は男の娘なのだから。

「よし。ボクもユウ君に負けないようにがんばらないと！！」

ボクはそれからいろんな事を体験し、学習した。そして今ボクは……。

「これより綺羅星じゅ、じゃなかった。ＳＳＨ総会を始めます。」

「今日こそ貴女を打倒してＮｏ．１の座をいただくわ。喰らいなさいＬＥＤライト１００％フルチャージシュート！！」

いつものＮｏ．２のＬＥＤライトを鏡で反射させる。そして鳩尾に一発いれておく。

「ギャー目に直撃しっ、くぼらっ！？」

倒れふせるＮｏ．２。

「相変わらずの手際の良さですの。」

「ありがとうガストでも貸したお金早く返してね。」

ちなみに５０００クレジット。

「ぎゃふん。ギャー！？」

何故かガストの椅子が高速回転しだす。

「相変わらずの最強ぶりだなだけど嫁の事に関してはアタシは負けないぞー！！」

ＲＥＤちゃんが立ち上がり５ｐｂ．ちゃんに指を刺す。

「ちなみにボクはシルバーハート様のサイン入りのバスタオル、使用済み歯ブラシ、マグカップ、さらには下着を持っているよ。」

どうやって手に入れたかは聞かないでね。

「これで勝ったと思うなよー！！」

「さておふざけはここまで真面目にやるよー！！」

ボクはがんばっています。ストリートミュージシャンとしてＳＳＨの最強の存在として……。

語り手ｓｉｄｅ

少女は変わった出会いによって少女の変革によっていったい世界はどう変わるのかは誰も知らない。だけど彼女が諦めない限り道は続いて行くとそう俺は信じている。あの時の俺に幸せをくれたのだから。ちょうどあの時の俺は女神として成り立てで不安だったからな。

それにしても掃除が大変だった。あのゲロトワールよくも俺にも被害をだして。

え、何故俺が語り手をしているのかって？簡単な話しだ……。
おっとその前に。「いい加減に語り手やるのはやめにしよう。疲れてきた。ちなみにイストワールは精神崩壊させてトイレに閉じこめた。」
トイレの扉をドンドンと叩くイストワール。
「すいませんだれかいませんか～。出してくださいここなんか臭いんです。あっ、臭いのは私か。あの本当にすいません出してくださいここ空気が薄くなって……。」
あれは無視しよう。
「それにしても５ｐｂ．ちゃんは今何してるんだろう。自分に自信を持って歌っていてくれるといいな。」
その頃の５ｐｂ．ちゃんは……。
「ガストよくもボクのシルバーハート様のハンカチを売り飛ばしてくれたね。歯を食いしばってねガスト思いっきりいくよ。音激斬雷電激奏！！」
ガストにギターを突き刺してジャガジャガやっていた。
「ギャー！？ガストが悪かったですのー！！だからやめてほしいですのー！！」
「悪・即・爆発！！」
ガスト爆発
「キャー！！」

「これがシルバーハート様のリスペクト。」

ＳＳＨ最強の存在５ｐｂ．ちゃんその力は四女神を凌駕するかもしれない。

最強の青髪　語る銀と嘔吐（後書き）

５ｐｂ．ちゃん無双。どうしてそんなに強いの？

５ｐｂ．「鍛えてますから。」

今回はまさかの主人公が語り手。

変なところがあったらご指摘お願いします！！

５ｐｂ．「全部じゃないかな？」

ぐさり。

お知らせ

誠に申し訳ないのですが現在まで執筆した小説の内容を大幅に削除して書き直したいと思います。削除するのは・対決の女神　降臨する最凶の薄紫のところから最後までです。
理由としては無理矢理ｍｋ２のキャラを出してしまい正直作者の限界になってしまいました。本当に申し訳ありません。　主に変更する点としては……。
・ｍｋ２のキャラは出さない。
・ＳＳＨのメンバー変更です。他にも変更する点はあると思いますがご容赦ください。女神達は無論出します。出しすぎたオリキャラはほとんど出ません。
応援してくださった皆さん申し訳ありませんでした。二度とこのような事がないように気をつけます。話の内容はまったく変わってしまいますがこれからも応援よろしくお願いします。ご意見等があったら遠慮なくお願いします。

削除は１０月２８日１５時から行います。このお知らせとお詫びはしばらくは残しておきます。

本当に申し訳ありませんでした。

対決する紫と緑（前書き）

リーンボックス編からの再スタート。どこかで見た事あるかもしれませんがご容赦ください。

対決する紫と緑

ネプテューヌｓｉｄｅ

現在メイドでスパッツなネプテューヌは協会の応接間でリーンボックスの女神グリーンハートことベールと対峙していた。

「それでどうやってそのゲームで勝負するつもりかしら妖怪乳お化け。それは恋愛ゲームでしょう。」

ネプテューヌはベールが持つ『お兄様は男の娘で弟！？』を指差し問う。

「よ、妖怪！？相変わらず失礼な娘ですわね。まぁ、いいですわ特別に許して差し上げますわ。私は寛大ですから。」

「いいから早く説明なさい乳お化け。」

間髪入れずに言うネプテューヌ。

「……心理的に殺して差し上げますわ。」

案外短期なベールだった。

「このゲーム『お兄様は男の娘で弟！？』は『お兄様は男の娘』の続編で「お兄様が魔女スイトワールの呪いで幼児化してしまうのよ。それを解決するために姉としてプレイヤーが奮闘すると言うストーリーよ。」なっ！？」

何故かベールのセリフに被せてくるＬＥＤなアイエフ。

そして説明を続けるアイエフ

「新しくなったのはストーリーだけではなくまぁ、細かく説明をしていたらきりがないから省略するけどたぶん今回説明が必要になるのは対戦モードですよねグリーンハート様。」

アイエフはベールを挑戦的な目で見つめる。

「貴女どうしてこのゲームの事を!?このゲームはまだ発売前で抽選で5名のみをテストプレイヤーとして応募しただけでまだ市場に出回ってさえいないのですわ。私だって大量に応募ハガキを送ってやっとの思いで手に入れたのに。」

ベールはアイエフを得体の知れないものを見るような目でみる。

ちなみにコンパはアイエフを危険な人を見るような目で見ていた。

「あぁやっぱり名前変えて一万通送って来たのってグリーンハート様なのね。」

その言葉により一層警戒心を高めるベール。

その言葉にさほどの興味もないネプテューヌはお茶請けで出されていたお菓子を食べ尽くそうとしていた。

「貴女はいったい何者なのなの!?」

「そう聞かれたら答えてあげなきゃかわいそうね。私は……。」

そう言うとアイエフは懐から一枚のカードを取り出す。そうそのカードこそ……。

「電気店のスタンプカード？」

電気店のスタンプカードだった。

「あぁごめんなさい。今の間違いこっちが本物。」

再度アイエフがカードを取り出す。

「まさか貴女ＳＳＨでしたの！？」

アイエフが取り出したカードそれこそギルド、ＳＳＨ『シルバーハート様は私の嫁』の会員カードであった。

「そう私こそがＳＳＨのＮｏ．２副団長のアイエフよ。」

そう言ってＬＥＤライトをかなり強めに光らせるアイエフ。無論室内でそんなことをすれば……。

「「「キャー！？」」」

こうなる。

三人が復活するまでアイエフにいろいろ説明をしてもらいましょう。

「構わないわ。まずはこのゲーム通称『お兄様シリーズ』は私達ＳＳＨが製作したものなの。無論ゲーム内に登場するお兄様のデザインの元になったのは我らがシルバーハート様よ。」

なるほどね。だからグリーンハートのハガキのことなんかを知っていたんだ。

「そう言う事。次にこの続編であるこのゲームに追加された対戦モードについて説明をするわね。」
恋愛ゲームなのに対戦するの？

「簡単に言えばどちらのプレイヤーが早くお兄様を攻略するのかって言ったところかしら。」

説明をありがとう。そろそろ三人が目覚めるみたいだしね。

「「「はっ！？」」」

三人が目を覚ます。アイエフは先ほどの説明を行う。

「……。」

警戒の目でアイエフを見るベール。

「まずいわね。何か興奮してきたわ。」
『お兄様は男の娘で弟！？』のパッケージを見て何故か興奮していた。

「ところで乳お化け様この勝負あまりフェアとは言えないわね。もし私達が勝ったら鍵の欠片を一緒に探してもらおうかしら。」

ネプテューヌはベールに条件を持ち出す。どうやら乳お化けは確定なようだ。

「どうして私がそのような事を！？

「負けるのが怖いのかしら？どうやら自信があるのはその胸だけのようね？」

「言わせておけば……いいですわ鍵の欠片でも何でも探してあげますわ！！」

「手間が省けたわね。ではさっそく始めるわよ！！」

「望むところですわ！！」

ゲームスタート。

名前を設定する二人。

「ここは無難に……。」

『1Pネームハイジン。』

「貴女本当にそれでいいの！？」

さすがのネプテューヌも驚きを隠せないでいた。

「え？何か可笑しなところでもありましたか？私ゲームの主人公に付ける名前は大抵これなのですけど。」

彼女は妄想廃人ベールやっぱり常識は通用しない。

「貴方がそれでいいなら構わないのだけれど……。私はやはり無難にこれかしら？」

『２Ｐネームスパッツ』

「だいたいの予想は付いていましたけどねぷねぷも人の事言えないですよ。」

もはや最後の砦のコンパ。

「それにしてもこの大陸の電気街ではどんなＬＥＤと出会えるのかしら？」

その言葉を聞いたコンパが財布を入れたカバンをしっかりと抱き締めたことは言うまでもない。

「行くわよ乳お化け！！」

「かかって来なさいネプテューヌ！！」

とりあえずゲームを始める二人の非常識人。

画面に攻略対象である魔女の呪いを受けて弟になったお兄様（以降弟君と記します。）が　登場する。

『……どうして俺がこんな目に合わなくてはならないんだよ。イストワールもう少し手はあっただろうに。』

何やらブツブツとつぶやく弟君。だがそんな事には気づかずにハイジンとスパッツは話しかける。

「おはようですわ。相変わらず可愛らしいですわねお兄様。いえ今は弟君と呼ぶべきかしら？」

「まさかここまで可愛らしくなってしまうなんて魔女の呪いいい仕事してるわね。」

『ん？うわっ！？いきなりだな。え～とイストワールからもらった台本は……あった、あった。おはようす、スパッツお姉ちゃん、ハイジンお姉ちゃん。もうちょっとまともな名前を付けろよお前等。』

何やらいろいろと可笑しな言動の弟君。これなら製作したＳＳＨ所属のアイエフが気づきそうなものなのだが……。

「コンパそのカバンの中にある財布を渡しなさい！！」

「アイちゃんいい加減にしてください！！これがなくなったら今日の宿代だけじゃなくてご飯だって食べられなくなっちゃいますよ！！」

「大丈夫よ私食べれる野草知ってるから。」

いろいろとコンパと大乱闘を繰り広げていた。

「では弟君私の為に美味しい朝ごはんを作ってくださいな。」

『えっ、俺が作るの？』

「当たり前ですわ。私料理なんて出来ませんもの。それに貴方の好きな事は大好きなお姉ちゃんに美味しいご飯を作ってあげる事とい

う設定ですわ。」

ハイジンお姉ちゃんの言葉に本らしき物を開き何かを確認する弟君。

『本当だ。イストワールそういう事は先言えといったのに……。わ、わかったよ。だ、大好きなお姉ちゃんの為に美味しいご飯を作るね。』

「御託はいいからさっさと作りなさい！！」

何故か怒り出すネプテューヌ。

『何故俺が怒られねばならないんだ。まぁいいとりあえず作るか。』

弟君料理中……。

『で、出来たよお姉ちゃん達。』

テーブルの上に並べられたのはトーストにオムレツ、サラダにヨーグルトといったシンプルな料理であった。

そしてここで選択肢の登場。

1、とても美味しいよ。

2、まぁまぁですね。

3、こんな物食えるか！！

「きましたわ選択肢！！」

「なるほど料理を食べての感想を言うのね。でも画面の向こうだから食べられないじゃない。ちなみに私は1番を選ぶわ。悪いわね早

い者勝ちよ。」

すかさず1番を押すネプテューヌ。

「それは言わない約束ですわよネプテューヌ。私が選ぶのは3番ですわ！！」

「貴女いったい何を考えているの！？馬鹿なのそんな事したら好感度ガタ落ちよ！！」

「まぁ見ていなさいなネプテューヌ。」

何故か自信満々のベールであった。

そして……。

「アイちゃんお財布を返してくださーい！！」

「大丈夫よ死ぬまで借りるだけだから。」

コンパもいろいろとピンチだった。

「とても美味しかったわ。」

『当たり前だ俺が作ったんだ不味いわけないだろう。』

1番を選んだネプテューヌなかなかの好感触であった。

そして問題のベール。

「こんな不味い料理なんて食べられませんわ！！」

その言葉と共に画面の中の弟君にオムレツが投げつけられる。

「弟君は設定では大好きなお姉ちゃんの為に作った料理をお姉ちゃんに投げつけられると好感度をあがるという超ドMなのですわ。さぁお姉ちゃんの胸に飛び込んできなさい！！」

『……ベールお前覚悟しておけよ。』

その弟君の謎の発言と共に画面は砂嵐に変わる。

「「……え？」」

しばらくすると画面が真っ暗になり好感度が表示される。

２Ｐ　５ポイント

１Ｐ　－５００００ポイント

勝者２Ｐ　スパッツ

「わ、私の勝ちね。」

「そ、そうですわね。私の負けですわ、鍵の欠片でしたかそのアイテムについて調べておきますわ。」

言い様のない恐怖に襲われる二人。

「なら私は宿に戻るわ。」

「待ってくださいネプテューヌ！！一人にしないでください！！」

「嫌よ！！よくわからないけど貴女の傍にいると何か危険な感じがするのよ！！」

「ねぷねぷ終わったんですか？ならアイちゃんを追いかけるのを手伝ってくださいです。私達の全財産を持って電気街に逃亡しちゃったです。早く追いかけないと私達本当に野草食べないといけなくなるですぅ！！」

「アイちゃんたまには役に立つわね。ならば行くわよコンパ！！という事で失礼するわね乳お化け！！」

その言葉を残してネプテューヌとコンパは電気街へと逃亡したアイエフを追いかけて教会から出ていった。

「いや！！置いていかないで！！」

誰もいない教会の応接間にはベールの叫び声がよく響いていたそうだ。

ベールｓｉｄｅ

私ベールことグリーンハートは今現在言い様のない不安と恐怖にかられていましたわ。なので教会の教員達を集めて恐怖をまぎらわそうとしていました。

「それでグリーンハート様何のご用でしょうか？」
ネコミミセーラー服を着たこの教会の教員長が私に用件を聞いてきます。
しかしながら良い年をしたおじさんがセーラー服はやはり辛いですわね。
用件はネプテューヌがいっていた鍵の欠片の事で良いですわね。
「鍵の欠片というアイテムを探してほしいのですわ。私の知り合いがどうしても必要としているのですわ。」
「わかりました。では至急調査いたしましょう。では失礼します。」
「待ってください！！皆さんどこに行くの！？」
「ですからそのアイテムの調査を……。」
「それならまた明日からすればよろしいではないですか。……そうですわ、今から皆でゲーム大会を行いましょう！！」
これなら一人になる事もありませんわ。私ったら素晴らしいアイディアですわ。
「はぁ、構いませんが……ん？ちょっとすいません携帯が。」
「おや私も。」
「自分も。」
「俺もだ。」
「まぁ、皆さんの携帯が一斉に鳴り出すなんて珍しい事もあるのですね。」

私のは大丈夫みたいですわね。

「え！？そんな大丈夫なのか！？」

「お父さんがぎっくり腰だって！？」

「弟が誘拐されただって！？」

おや、何やら皆さん慌てていますわねどうしたのかしら？

「申し訳ありませんグリーンハート様急用が出来たので帰らせてもらいます。」

「私も！！」

「僕も！！」

「「「失礼します！！」」」

「待ってください皆さん私を一人にしないでください！！」

私は次々に急用だといって教会を去って行く皆さんを引き止めようとしますが皆さん出ていってしまいます。ついには誰もいなくなってしまいましたわ。

「し、しかたありません。こんな時はネットゲームでもしますわ。」

私は恐怖と不安を忘れる為に自室へと戻ります。

ベール移動中……。

「さてと電源を入れてと。あら？おかしいですわね電源が入りませんわね。」

私は不思議に思い何度も電源をいれようとします。ですがまったくつく気配がありませんわ。この間買い直したばかりですのにもう駄目になってしまったのでしょうか？

「しかたありませんわね。同人誌販売店にでも行ってみましょう。」

私がそう決めて立ち上がると……。

ピキッ，という音をたててパソコンの液晶にひびがはいる。

「え、縁起でもないですわ。さ、さぁ急ぎましょう。あ、あはは。」

私はもはや駆け足どころか走って教会の外を目指します。

「とりあえず何事もなかったですわね。心配して損しましたわ。」

私は息を整えて安心して同人誌販売店へと向かおうとします。

「どこに行くのかなベール？いやハイジンお姉ちゃん？」

「……！？」

そのどこかで聞いた声の主を確認しようとする間もなく私の身体は浮遊間に包まれます。

「いったいなにが……！？」

回りを見渡してみると雲一つない青い綺麗な空が見えた。……どの方向を見ても。どうやら私は空中に投げ出されたようですわ。

「変身！！」

直ぐ様私はプロセッサユニットを装着して体制を整えますわ。そして私を空中に投げ出した張本人を見る。そう、私の兄であるシルバーハートを。

「久しぶりだなベール。」

ベールが見つめる先には白いコートを羽織ったユウが女神化をせずに空中に浮いていた。

対決する紫と緑（後書き）

きょうのゆにちゃんに変わる新しいのを考える必要があるかもしれない。その時ノワールは？でも書いてみようかな？

ノワ「お断りよ。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2592w/

男の娘な女神様

2011年10月28日17時04分発行